

ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第4号



ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第4号

ものがたり観光行動学会

Association for the Study and Practice of Narrative Tourism

創刊にあたって 白幡洋三郎	3
■ シンポジウム	
9万年の大地における新たな観光と若者の旅	4
・登壇者 藻谷浩介／桑野和泉／田口五朗／橋本祐輔	
・コーディネータ 加藤晃規	
New Tourism for an Area Characterized by a Geological Feature of Ninety-thousands Years, and a movement of the Young Symposium on Religion and Tourism	
■ 研究論文	
テムズ河畔の世界文化遺産を巡って 年間イベントを活かした空間利用に関する研究 ——英国世界文化遺産のまちづくり調査(2014.4.12~26)概要その1 —— /加藤晃規	22
World Cultural Heritages of UNESCO along the Tames River - Field Survey Series in UK, No.1- / KATO Akinori	
■ 研究論文	
観光都市奈良の発展に関わる仏像鑑賞の意識変化 ——岡倉覚三と和辻哲郎との連続性から —— /北廣麻貴	38
Development of Tourism in Nara and Changes of Minds in the way of Appreciation of Buddha Statue - Cases of Okakura Kakuzou and Watsuji Tetsurou- / KITAHIRO Maki	
■ 研究ノート	
野性への旅の記憶 /高田公理	52
Memory of a Trip to the Wild / TAKADA Masatoshi Yasutaka	
■ エッセイ	
宿泊施設のコモディティー化とものがたり観光の夢 /李 有師	59
編集規程および執筆要領について 概要	61
旅の原稿を求めています	62

創刊にあたって

本学会論文誌創刊の意図は「観光」を論じた読み物をつくることである。

「観光」は地域や学問領域を越えたたのしみであり、学ぶよろこびである。共通のたのしみやよろこびを「読み物」として会員に伝えるために印刷物として配布することは学会に求められている任務だと考えた。

学会員共通の関心をかき立て、共通の課題に応える「読み物」をつくりたい。そして「読み物」であるから研究者以外の一般の人々にも知ってもらい、読んでもらいたい。学会にふさわしい学問的な内容を備え、学術論文の体裁をもった堅めの読み物も、事例報告やエッセーなど柔らかめの読み物も収めたい。書きたい人の熱い思いを受けとめる場も必要だ。こうしてこのような学会誌が誕生した。

投稿する人も手にとって読む人も共通の関心は「読み物」である。すなわち書き手には、人に読ませようとする配慮、読んでほしいという情熱、が求められる。一方、読み手には読み物として妥当かどうか、わかってもらおうとの努力、気配りがあるかどうか、の吟味をお願いしたい。書き手と読み手の双方が求めるものの間に本誌の輝きは生まれるだろう。

『ものがたり観光行動学会』には、呼びかけに応じて、物語が好き、歴史が好き、人が好き、遊びが好き、そんな人々が集まってきた。そしてメンバーが納得できる舞台づくり、環境づくりに取り組んできた。

若い世代には、何か文章を書いて投稿できる媒体が欲しいという声が強い。ここに誕生したのは、まとまった考えを発表したい、聞いて欲しい、読んでほしい、意見をたたかわせたいという思いを持つ人に提供される新たな場所である。

ものがたり観光行動学会 会長 白幡洋三郎

シンポ
ジウム

9万年の大地における 新たな観光と若者の旅

[登壇者] 藻谷浩介(株式会社日本総合研究所調査部 主任研究員) / 田口五朗(NHK 福岡放送局 局長)
桑野和泉(湯布院温泉観光協会 会長) / 橋本祐輔(大会実行委員長・豊後大野市 市長)
[コーディネータ] 加藤晃規(学会副会長: 関西学院大学総合政策学部教授)

New Tourism for an Area Characterized by a Geological Feature
of Ninety-thousands Years, and a movement of the Young
Symposium on Religion and Tourism



0. はじめに

加藤（コーディネータ） 関西学院大学の加藤と申します。

「9万年の大地における新たな観光と若者の旅」と題しましてセッションを始めたいと思います。藻谷先生の基調講演「若者はなぜ旅をしなくなったのか」を受けまして、パネラーの皆様のお話がどのように展開されるのか楽しみです。

藻谷先生には、現在の少子高齢化を側面から捉えた地獄絵を非常に面白く的確に描いていただきました。この地獄絵に対して、いやいや地域の側はそんなことはないですよといったご意見が出るのではないかと思います。ニューツーリズムという言葉が市民権を得てきていますが、このことも踏まえていただき、パネラーの皆さんそれぞれが関わっておられる分野やお仕事の紹介と併せて、最近の観光現象をどのように見ておられるかお話しいただきたいと思います。まずはレディファーストということで、桑野さんお願いします。

1. 若者を迎えるための湯布院の多様な入口づくり

桑野 皆さんこんにちは。山向うの湯布院温泉から参りました桑野和泉です。

ものがたり観光行動学会の第3回年次大会を大分で開いていただき、本当にありがとうございます。大分県民といたしましても非常にうれしく思います。また、豊後大野市での大会ということで大変楽しみにして参りました。

まずは湯布院のことをお話しさせていただきます。湯布院は年間400万人近くの方たちにお越しいただいておりますが、実は私たちが若い力を感じるようになりましたのは、ここ数年のことです。私たちは地元主催のいろんなイベントをやっていますが、先日も畜産振興とふる里を守ることをテーマにした「牛喰い絶叫大会」を開催しました。この大会は40年近く続いておりますが、これまではイベントのすべてを地元の力でやっておりました。しかし、高齢化が進んでいますので、イベントの担い手は私よりも年上の方たちがほとんどでした。ところがここ5、6年は、学生さんたちがボランティアで関わってくれるようになり、その数は年々増えて、現在は150名のボランティアのうち40名近くが学生ボランティアという状況です。20歳代前後が中心ですが小学生もいます。この人たちは大分県内や九州全域から来てくれています。一度ボランティアとしてイベントに関わると、プライベートでも湯布院に来てくれるようになります。

私は、若い人たちが旅をするしなだけではなく、地域と関わりを持つ何らかのきっかけがあれば出かけてきてくれると思います。彼らにやってもらっているのは、私たちと一緒にお客さんたちを迎えるボランティアで、私たちは彼らに何も用意していません。しかし、確実に湯布院のファンやリピーターになってくれています。このように、こちらが関わりの入口を多様に設けることで状況は変わってくると実感しています。また、若い人をはじめ外の人たちが入って来ると、地元のおじちゃんおばちゃんたちも喜びますし、私たちも若い人たちからエネルギーをもらって、イベントにもこれまで以上の力が入ります。

今回のテーマに関しましては、私たち迎える側が多様な入口をつくるのが大切であり、そのことが将来的な湯布院のあり方につながっていくのだと思います。





加藤 迎える側の入口の多様さが必要だということをご指摘いただきました。続きまして九州で幅広く活躍されておられます NHK 福岡放送局長の田口様お願いいたします。

2. 一過性のハコモノ観光からの脱却

田口 皆さんこんにちは。NHK の田口でございます。去年東京から福岡に転勤してまいりました。大分の出身です。平成 5 年から 7 年まで長崎にいたことがありましたので、九州は 17 年ぶりです。30 年余り報道の現場で記者をしてまいりました。主に、事件・事故、航空問題、原発、防衛などを自分のライフワークにしていまいりましたので、観光につきましては全くの素人でございます。今日は、一般ピープルの視点から話をさせていただければと思います。

ちなみに、平成 20 年から 2 年間、「ニュースウオッチ 9」という番組で青山祐子アナウンサーの隣でキャスターとして画面を汚してきました。その節は大変失礼いたしました。

私が福岡の NHK で仕事をしている中で、一般ピープルの視点で一番エポックメイキングな出来事は何と言っても、来年の大河ドラマの「軍師官兵衛」です。黒田官兵衛は福岡 52 万石の礎を築き、大分では中津城を築城しました。生まれ育った播磨に加えまして中津と福岡がご当地になりますので、それぞれの地域に結び付けたいという大いなる期待を寄せていただいています。特に、ドラマの前半を描くことになる姫路市においては、かなりの盛り上がりだと聞いていますし、豊前中津でも唐揚げにつぐ盛り上がりようです。

一方、福岡でも期待は大きいものがあります。しかし、関ヶ原の戦いの後、官兵衛の息子の長政は福岡 52 万石を与えられ福岡城を築城するのですが、福岡に住んでいる時間はあまりありませんでしたので、私個人としては、ドラマの最終

回ぐらいにしか福岡は描かれたいのではないかと懸念しています。仮にそうだったとしても、1年間を通してのせっかくのドラマですから、「平清盛」や「八重の桜」ほど盛り上がらなかったとしても、地域を盛り上げる起爆剤にするタイミングを逃す手はないと思っています。

いろんな地域を舞台にしてきたこれまでの大河ドラマの歴史を見ますと、ご当地では、大河記念館といったようなハコモノをつくって客を呼び込もうとされてきた経緯があります。しかし、それらはことごとくと言っていいほど失敗し、大赤字を抱え込んでいるケースが少なくありません。大河ドラマが終わってしまえば、だれも来ないような一過性のハコモノ行政的取り組みは、これからはあり得ません。10年、20年そして50年先ぐらまで記憶に残りかつ、観光客を呼び込めるような将来を見通したものを考えなければいけないと思います。私は福岡県や福岡市の方たちにそのように話しております。

ちなみに福岡城は、現在天守閣はなく、立派な石垣があるだけですが、福岡の観光のランドマークとして福岡城を再建しようという動きが出ています。予算が潤沢な時代ならばそのような選択肢もあるかもしれませんが、今やそういう時代ではありません。ハコモノに代わるランドマーク的なものをこの1年間で見つけないといけないし、一過性ではないものを観光資源に結び付けていかなくてはならないと思います。

加藤 大河ドラマのあとの祭りについて示唆的なことをご指摘いただきありがとうございます。ありがとうございました。

それでは、先ほど基調講演をしていただきました藻谷さんにお話をお願いします。

3. 地域が持っている価値に気付くことから

藻谷 豊後大野にはこれから観光客は来るのか、観光客が来たとして「ななつ星」は停車するのかといったことが問題になるかもしれませんが、大事なことはそういうことではなく、何がこの地域の宝なのかを豊後大野の皆さん自身が考えることです。そんなことは当たり前だと思っておられるかもしれませんが、例えば湯布院はダムに沈めてしまえとまで言われた時期がありました。今はそんなことを言うのを考えているのだということになります。当時の湯布院はお湯が湧いているだけだからいらぬという扱いです。しかし、全九州の人が価値のあるところだと考えるようになり、東京の人にまで湯布院の名が知られるようになったのは、地元の方たちがいろいろと努力されたからです。



豊後大野では、かつての湯布院のようにダムに沈めてしまえといったようなひどい話はないでしょうし、沈めることはできませんが、まだまだ地域の皆さんがいろんな宝を発見していないのではないかと思います。実はすごい価値が豊後大野にはあるはずですが、ただし、自分たちがその価値に気が付いて外に知らせなければいけません。湯布院はお湯が沸いているだけで何の個性もないと言われていたのがなぜこれだけ知られるようになったのかを学べば、豊後大野にはネタがもっと多いことに気が付くはずですが。

豊後大野は山深い本当の里山の里だと言うことができます。もう一つの特徴は、竹田にも共通することですが、引かれている水路網がすごい。石造りの水路によって水が引かれ、ことごとく棚田を潤しています。水路を売り物にしているのは熊本を通潤橋ですが、あれは台地に水を引いて田んぼにしようとしたものです。豊後大野や竹田は、かつて水路づくりにもものすごい執念を燃やした地区です。昔のことですから、水を下から上に上げるわけにはいかない。上から下に流すしかない。大変な苦勞をして水路をつくりました。日本では当たり前だと考えられていますが、よその国だと世界遺産です。水路網が一つひとつの田んぼを潤し、それぞれの田んぼでそれぞれにいろんな作物がとれます。

豊後大野の水路網はウルトラ玄人好みの観光資源です。百年後に、豊後大野のすごいところは水路だと誰かが言っていたそうだが、百年前には水路が豊後大野の資源だとは気が付いていなかったんだと言われるようになるのではないかと私は思っています。

加藤 ありがとうございます。豊後大野の宝の一つ掘り当てていただいたように思います。湯布院はダムの底に沈む予定だったという話がありましてびっくりしましたが、このことにつきまして桑野さんお話し願います。

4. 地元の力で磨く地域の価値

桑野 昭和20年代には湯布院をダムにしてみようかという話がありました。昭和28年頃、湯布院の半分ほどの人たちはダムにしようと考え、あとの半分ぐらいの方たちは次世代に残したいということでしたが、最終的にはダムになりませんでした。また、今でこそ訪れてみたい温泉地と言われるようになりましたが、私の子どもの頃は奥別府湯布院と言われていました。その頃父たちは、別府には程遠いし、久大線沿線の天ヶ瀬には追いつけないけれども、同じ沿線で湯布院が一番近い法泉寺温泉には追いつきたいと言っていました。湯布院には温泉はあっても、由布岳があっても、田園地帯があっても人が来てくれませんでした。今でこそ湯布院は人気があってお湯も日本で2番目に出て素敵じゃないですかと言われますが、昔からそうだったのではありません。素敵だったら、40年前にダムにしようという話が出るようなことはありませんし、人が来ていたはずですよ。

そのような湯布院でしたが、地域の人たち自身が自分たちのまちの魅力を探し、例えば、映画館はなくても映画祭が行われています。コンサートホールはなくても星空の下で湯布院らしい音楽祭をやっています。湯布院のまちの中では辻馬車がゆっくりと走っています。といったように、住んでいる私たちが湯布院にしかない魅力を外に向かって発信しました。

豊後大野には本当にいろんな資源があっというらやましいと思います。住んでおられる方たち自身が、住んでよしと感じておられるところをしっかり見つけ、磨いていければと思います。

加藤 地元の方たち自らが地域ブランドを磨いてきたという湯布院のお話でした。ではつぎに、豊後大野市市長の橋本さんにご発言をお願いいたします。

5. 豊後大野が持っている多様なポテンシャル

橋本 まずは、ここにいらっしゃいますお3人の錚々たる方々をお迎えしてシンポジウムができますことを、大変感謝しております。

先ほど控室で桑野さんに、大分では温泉がない自治体は津久見市と豊後大野市ですよというお話をしましたところ、桑野さんは、いや私たちのところは温泉があってもなかなか人が来なかったんですよとおっしゃっておられました。豊後大野市のまちづくりにとりまして、このことが一番大事なところだと私は感じました。

最近、NHKさんには大変お世話になっています。先日はBS放送の「みんな



DE どーもくん」の公開収録をさせていただきました。また続いて「巡回ラジオ体操・みんなの体操会」を開催していただき、朝5時過ぎから2,500もの人の方たちが集まるような大盛況でした。さっそくその日に、東京とアメリカにいる私の友人2人から聴いたよという電話が入りまして、すごいなと思いました。

大河ドラマにつきましては、福岡県柳川藩主の立花宗茂^{むねしげ}の奥さんを候補に推したいと思います。彼女のふる里はこの豊後大野市の鎧ヶ嶽で、大友宗麟の家臣の娘さんでした。ぜひ彼女のことを大河ドラマにさせていただければと思います。また、源義経は本当は豊後大野に来るはずだったと言われており、そのために築城したのが岡城だったという歴史的ロマンのある物語。あるいは真名野長者の物語。これら3本のうちいずれかを大河ドラマにお願いしたいと考えています。

豊後大野の方はご存知だと思いますが、藻谷先生にはケーブルテレビで先生の報告を紹介させていただいています。私たちが中山間地域をどのように切り開いていくべきかというヒントをお話させていただいています。そのようなこともあって、今日の藻谷先生のお話を期待して来られた市民の方もいらっしゃると思います。先ほど大黒さんからお話がありましたように、豊後大野市は観光の面では白地であって、どこにも組み込まれていない、いや、どこにも組み込んでもらえなかったということが本当かもしれません。しかし、それだけに、私たちは自力で強い覚悟を持ってやろうと考え、ジオパークという大きな統一テーマに取り組むことになりました。

今月1日に、100歳の高齢者の方の誕生日のお祝いに伺いましたが、この100歳のご婦人がジオパークのことを気にして勉強されているということでした。

た。私はこれを聞きまして非常にうれしく思いました。

九州オルレにつきましては、チェジュオルレの理事長さんとお話したときに、豊後大野が一番いいコースですよとっていただきました。社交辞令ではなく実態として素晴らしいということでした。このことは私たちの今後のありようを示していると思っています。

さらに、身体的ツアーということでは、これはまだやっていないのですが、祖母山の麓を新月の星の見えない夜に歩くツアーをやってはどうかと考えています。手のひらさえ見えないような普通には体験できない非日常の場所です。非日常が日常的に体験できる場所だということは、ツアーをやってみないと分からないのですが、しかし、このツアーをやらない限り誰にも知ってもらえません。だいぶ前から言っているのですがまだ実現していません。このような真っ暗闇と戦うツアーはポテンシャルがあると思います。市民の皆様にも、そのような非日常も豊後大野の資源であるということに気付いていただきたいということで紹介させていただきました。

加藤 ただいま市長からはNHKへのご要望も込められたお話がありましたが、今の市長からのプロポーザルにつきまして、田口さんいかがでしょうか。

田口 冒頭からつれない返事をするつもりはございませんが、このようなご要望は全国から頂いております。大分県を例にとりますと、大河ドラマで友宗麟をやってほしいという非常に強い要望をある団体から毎年のようにご陳情いただいております。そのようなことではあります、今度会長に会いましたら伝えておきますけれども、私が言ったところで何の確証もありません。よろしくご理解をお願いします。

6. 「住んでよし」 あってこそ「訪れてよし」

加藤 第1ラウンドとして皆様それぞれに地域や観光についての想いを紹介していただきましたが、ここからは本題に入りたいと思います。

このセッションのタイトルに9万年の大地という言葉があります。私も昨日はじめて豊後大野市歴史民俗資料館の豊田さんのスライドを拝見しまして、阿蘇山が爆発した溶岩の上に豊後大野の大部分が成り立っているということを知り、そこから豊後大野の物語を始めようということなんだと分かりました。9万年前から始まる物語とオルレとジオパーク。この3つを豊後大野の売り物にしよう

ということだと理解をさせていただきました。

桑野さん、田口さん、その辺りのことはいかがでしょうか。外の目から見て、その可能性について、好きなことを無責任で結構ですからご発言いただければと思います。

桑野 たまたま先週ある新聞に、豊後大野の子どもたちがジオパーク認定審査中にガイドを務めたことや先ほどの高校生の神樂のことが大きく取り上げられています。ジオパーク認定ということが合併して生まれた豊後大野市の共通意識づくり

に大いに役立っているのではないかと思います。ところで、私も豊後大野のジオサイトマップをいただきましたが、豊後大野の皆さんは全部行かれていますでしょうか。私のまちも合併して由布市になりましたが、湯布院の隣まちの庄内や挾間も自分たちが案内しなければならないということで、これらの地域の方たちと交流をしています。豊後大野では子どもたちは多分、ジオパークのエリアのことを勉強して外の皆さんに伝えられるようになっていくと思いますが、しかし、私たちの年齢以上の人たち一人ひとり、特に年齢層の高い方たちが頑張って豊後大野の魅力を最大限伝えることができるようにならないといけないと思います。

あと一つ、豊後大野を褒めたいと思っていることがあります。会議に出席しますと会議の前に弁当がよく出ますが、その内容はどこにでもあるような弁当ばかりです。今日は12時集合ということでしたし、豊後大野には道の駅がありますので、絶対おいしい弁当が出ると確信してここに参りました。パネラーの皆さんもいただかれましたが、大変おいしかったですよね。豊後大野の皆さんは当たり前だと思っておられるでしょうが、おいしいんです。豊後大野の方たちは幸せです。弁当にはこの土地でとれたものがしっかり入っていましたが、このような当たり前の方がちゃんとできていることこそが基本だと思います。

日本で観光立国ということが言われ始めてから約10年ですが、観光立国について最初に「住んでよし、訪れてよし」ということを言われたのが亡くなられた東大の木村尚三郎先生です。先生も食いしん坊で、一緒に出張に参りますと、「桑野さん今日のお昼はどうだろうね」と言っておられました。昼食であっても食べることから地域を見ることができる。食べることによって「住んでよし」が分かります。そのような基本ができている豊後大野市は、住んでいる人たちが日々食べながら、それを人が来たときにもちゃんと出せるという日常を持っています。人に来てもらうためにはこのことは大事なことであり、活かすべきところだと思います。

訪れる人を裏切らない豊後大野だからこそ、大分県内の人たちが道の駅に買い物に通って来てくれているのだと思います。私も今日の帰りに買い物をして帰ります。このようにリピーターを生むような入口をすでに豊後大野は持っています。ではこれからどうしていくかということになりますが、ジオパークという大きな柱ができてエリアの人たちみんなが協力し、「住んでよし、訪れてよし」が始まれば何も怖くはない。新たにスタートした豊後大野市は、5年前、10年前より今のほうがはるかに良くなったと思いますし、時代も求めています。10年前には豊後大野の魅力が分かる人は少なかったのではないかと思います。しかし、旅の経験を重ねると旅への想いや目的が変わってくるように、単に何かを見てそれで終わりの旅ではなく、もう一度、二度さらには三度というように旅を深めていきたいと考えるようになっていきます。

先ほど、豊後大野の水の話がありましたが、日本酒もおいしいところです。私は食べるのが好きですが、お酒も好きです。実は、豊後大野のお酒に出会う前はワインばかり飲んでいましたし、私どもの旅館の玉の湯でもワインを勧めていました。しかし、豊後大野のお酒に出会ったときに、それまでおいしい大分県の清酒のことを伝えられなかったことが大分県民として恥ずかしいと思いました。現在は、大分県の特別な水のことやおいしいお酒のこと、豊後大野の良さといったことをお話しできるようになりました。このように、私たち自身が気付いて伝えていくべきことはたくさんありますので、隣の由布市の私たちも一緒にいろいろな可能性を広げていくことができればと思います。



7. リピーターを生むための客層の絞り込み

加藤 豊後大野のお宝について総括していただいたと思います。ありがとうございます。ありがとうございました。

豊後大野では、ジオパークをベースにその上にオルレ、さらにその上に神楽といった伝統文化を積み重ねて、三層構成でやっていこうという雰囲気になっていますが、マスメディアの立場から田口さんいかがでしょうか。

田口 桑野さんがおっしゃったことにはほとんどといっていいほど賛同いたします。

私は、大分生まれですが、お恥ずかしいことに豊後大野にお邪魔するのは初めてですし、豊肥線に乗ったのも初めてです。県の北のほうには行っていますが、南のほうにはあまり来たことがないというのが実情ですが、しかし、私のような大分県民は決して少なくないという気がします。

今日はいじめてお邪魔して、目の前で迫力ある神楽を見させていただき、NHKで放送しましたオルレの番組に出てきました磨崖仏の映像を見ますと、豊後大野には魅力ある資源がたっぷりあることを肌身で感じることができました。

今日のシンポジウムに当たりまして、市から平成20年に作成された観光まちづくりビジョンを資料としていただきました。これによりますと、11の物語として、豊後大野の文化や歴史をはじめとしたいろんな可能性が探られています。このビジョンには、豊後大野の観光資源が網羅されていますが、可能性を探り出したあとに、様々な可能性にどのように優先順位をつけて実行していくかということが極めて重要になります。そのために豊後大野市さんは、ジオパーク、オル



レ、伝統芸能などの文化という三本柱をお考えになったのだと思います。これは極めて妥当なことだと思いますが、課題は、どのようにそれらを結実させていくかということや、持っているお宝をいかに磨いていくかという方法論が重要になります。

話はガラッと変わりますが、NHKの場合、テレビを見ていただいている方の年齢層が今、非常に偏っております。だいたい60歳代以上の方がほとんどで、50歳代、40歳代の方はかなり少なく、30歳代、20歳代になるとほとんど見ないという状況です。お年寄りに80歳、90歳まで長生きしていただいて受信料を払っていただければいいのですが、50年後までそのようには参りません。そこで、今の40歳代、50歳代の方たちが50年後90歳代になったときに受信料を払っていただくにはどうすればいいかを考えています。そのためにNHKはここ数年、家庭の中で力を握っておられる女性、しかも、パワーがある40歳代の女性をゲットして離さないために力を入れてやっているのがドラマです。様々な^{ひんしゆく}顰蹙を買いながら現在は、「ガラスの城」という不倫めいたドラマをやっており、その前は「セカンドバージン」というNHKとは思えないベッドシーンのあるドラマを放送しました。このように、顰蹙を買うこともあります。24時間お年寄り向けの番組にしなくてもいいのではないかと、たまには40歳代のお母様に見ていただく番組や10歳代の方が見るジャニーズ系の番組があってもいいのではないかと考えています。これから試行錯誤しながら、ターゲットをどう絞ってコアとなる客層をいかに驚掴みにするかということを考えることが大事なことだと思っています。

ジオパークやオルレにつきましても、どのような客層、どのような年齢層を核として掴んでいくかということを試行錯誤しながらお考えになっていくと良いのではないかと思います。先ほどお聞きしましたら、オルレは中年層のご夫婦が多いとおっしゃっておられました。私は山登りをしますが、八ヶ岳などに登るとほとんどが中高年層です。祖母・傾山に私は登ったことがないのでいずれトライしてみたいと思いますが、やはり山が好きな人間だったら、関東からでも絶対に来ます。このことを活かさない手はないと思いますし、オルレにしても山登りにしても、とにかくターゲットにしている人たちに1回来てもらおうような仕掛をどのように作り出すかが重要で、それがはまれば絶対にリピーターになってくれます。中高年はお金と時間がありますからリピーター要員として大事です。

加藤 今のお話をお聞きになって藻谷さんいかがでしょうか。

藻谷 ターゲットを絞るという話が出ましたが、例えば誰が来るのかを絞らなければジオパークって何ですか、誰が来るんですかということになります。皆さんは興味ないようなことでも、世の中にはいろんなものに興味を持っている人がいます。割によくいるのが花が好きな人です。花が好きな人は普通人なんです、得体のしれない裏辻に入っていったりします。チョウが好きな人は地の果てまで探しに行きます。地形が好きな人もいます。私がそうです。豊後大野に降った雨はどのようなルートで海に出て行くかといったことはほとんどの人は興味ないと思いますが、私は興味があります。祖母山北側の原生林に降った雨は竹田を通らずにほとんど緒方川に流れていきます。緒方川の水量が安定しているのは原生林のお蔭です。

このような地理的事象は、10人、20人の人を連れて来てもその中の一人に意図をわかってもらえるぐらいで参加率は低くなるでしょうが、リピート率は高いと思います。また、豊後大野に関わりのある武将の緒方三郎惟栄さぶらうこれよしに代表される緒方姓は地名にそのまま残っていて、非常に古い武士の勢力です。犬飼姓もそうです。特に緒方姓は、邪馬台国の時代から続いているのだと思います。全国の緒方さんの先祖の地はこの辺りなのかもしれません。緒方姓の人だけをターゲットにして、緒方さんだけが集まって楽しむようなことをやるのも面白い。参加率は低くてもリピート率は高くなります。

8. 「当たり前」と「何もない」から「ありがたい」へ

藻谷 ところで、全国のうちうまくいかない観光地に取り付いている病気があります。これが住民に取り付いているとうまくいきません。住民に取り付いているならまだしも、観光事業者に取り付いている場合はどうにもなりません。その病気は、ダメな観光地の人が必ず言う二つの言葉に現れます。その一つは「何もない」です。「何もない」と言っているところは、宝を持っていても踏みにじって壊しています。もう一つの言葉は「当たり前」です。言っている本人は傲慢とは思っていません。すぐご傲慢です。地元の人にとって「当たり前」のことこそが最大の資源です。「当たり前」という言葉を口にしないようにしましょう。「当たり前」の代わりに「ありがとう」と言うようにしましょう。「ありがたい」はめったにないということで、「当たり前」の反対語です。サンキューあなたに感謝しますということではなく、「普通ないよね」ということです。まさに、最近若い

人たちが良く使う「ありえねえ」ということです。「ありがたい」という言葉が自然に口をついて出てくる地域は、自分のところには他にはないものがあることが分かっているということです。

「ありがたい」と言えば、観光資源が何かということが分ります。ただし、地域の皆さんだけの目で考えると失敗します。よその人間の目を見て、何が「当たり前」ではなく何が「ありがたい」ということを一から考え直す必要があります。自分にとって一番「当たり前」のことが一番「ありがたい」ということに気が付かなければいけません。

9. 市町村合併と地域振興

加藤 「何もない」と「当たり前」を禁句にして、その代わりに「ありがとう」と言おうというご提案をしていただきました。またその前に、豊後大野市に降った雨はどこに流れていくかという流域のお話があり、豊後大野市がいくつかの流域圏に分かれていることを知りました。

日本の文化は、流域圏によって違っているという河川学の基本的な考え方があります。しかし、日本では明治以来、流域が違うところを無理やりに行政区画という切り方で合併させて自治体をつくってきました。平成の大合併のあと、各地の自治体は大変な苦勞をされています。流域の違う地区を併せ持っておられる豊後大野市さんは、地域振興という旗のもとにどのような考えを持ってやろうとしおられるのか大変興味があります。その中でも、ジオパークとオルレと伝統文化という個性をどのように活かそうとされているのかを市長さんにお話しただければと思います。

橋本 7つの町が合併して豊後大野市になりましたが、いつまでも分裂しながら市を運営していくのは非常にまずいことです。お互いの良さに気付き合いながら、市を盛り上げていこうということのきっかけになるのがジオパークです。ジオパークは、どんな年代の人でも、どの地域の人でも参加できるという良さがあります。先ほど藻谷先生からは地質学に興味を持っておられる方もあるし、チョウが好きな方もおられるというお話がありました。私たちは、どんな年代の方でも男女を問わずに、また、どんな地域の方でも受け入れることができる素地を持っていますし、メニューを用意できると自信をもって申し上げることができます。

例えば、チョウのアサギマダラは、かつては姫島に多く生息していましたが、現在では豊後大野で多く見られるようになっていきます。また、緒方姓の集まりも

あります。元 NHK の解説委員だった緒方さんは豊後大野の出身ですし、俳優の緒方拳さんも当市を訪ねてこられたことがあります。また、祖母山の原生林の足元は本当に暗いと感じます。私は熊がきっといるはずだというロマンを持っています。

このように、外の皆さんにはあまり知られていませんが、自慢できることはたくさんあります。そのような素地をどう磨いていくかが課題です。

10. 地域密着型の価値創出

桑野 湯布院では、外国から日本に興味を持って来られる方たちの流れを感じます。豊後大野がオルレによって、外目で見てもらえるようになったことは大変良いことだと思います。外から来た人はそのまちの良さがよく分かります。

「ななつ星」につきましては、沿線の人たちが「ななつ星」に手を振ってくれるということで、乗客の方たちからの評判が大変良いと聞いています。手を振ってくれる風景が九州にはある。ただし、湯布院では、いつまでも止まるとする「ななつ星」の精神でやっています。

とにかく、新たな出会いの機会を積極的につくることで地域の個性を磨くことが大事です。違う世界の人たちの成功事例を学ぶことも必要なことです。

田口 「ななつ星」は九州の魅力再発見の一つの象徴だと思います。NHK では、「私にとっておきの1枚・九州沖縄物語」と題して、とっておきの写真を募集することにしています。これまで知らなかったことに目を向け、自分たちのまちの宝を再発見しようということのきっかけになり、観光にも結び付いていけばと考えています。

加藤 久留米市では観光地づくりの事業に当たって、地域住民とともにまちの物語を一千個つくったり、まちの宝探しをしてマップにしたりといったことを通じて、数十名のボランティアガイドを育成しました。また、ガイドさんはマニュアル化されたものをただ読むのが普通ですが、そうではなく、自分とまちの関わりを自分の言葉で語ってもらうようにしました。ボランティアガイドの方のまちとの関わりが物語として展開されるまち案内になっていまして、地域密着型の最先端と言える取り組みです。

それではここで、会場のオーディエンスパネラーのお2人にご発言をいただきたいと思います。

森（オーディエンスパネラー）

朝地町土地改良区の仕事をしながら九州オルレのサポーターをしています森です。土地改良区では114kmの水路を管理しておりますので、先ほど、豊後大野の水路のことを世界遺産に値すると言っていただきました、大変うれしく思っています。

オルレ奥豊後コースは、朝地駅から竹田市の豊後竹田駅までの12kmですが、他の九州オルレコースの中でも最も人気のあるコースです。奥豊後コースでは独自に23名のガイドを育成しました。この23名にいかに関与してもらうかがこれからの課題です。また、私が参加しています朝地フレンドクラブという総合型地域スポーツクラブではリバートレッキングをやっていますので、祖母山の原生林での暗闇体験はすぐにでもやりたいと思いました。

豊後大野は何もないと言われることがまだまだ多いのですが、豊後大野の価値を高めていくために何をしていくべきなのかを考えながら、これからも頑張ってやっていきたいと思えます。

豊田（オーディエンスパネラー）

豊後大野市歴史民俗資料館の豊田です。民俗資料館職員の立場から申しますと、地域づくりのキーワードは「学び」ということになると思います。中でも大事なのは大人の方たちの「学び」です。社会教育の中に、地域に密着した魅力ある学びの場をどのように提供するかが私たちの課題だと思っています。



11. 豊後大野への提案

加藤 観光まちづくりを進めるに当たって、インバウンドが先でまちづくりはあと回しというような、考え方が逆になっているケースがよくあります。「住んでよし、訪れてよし」という言葉のように、住民のためのまちづくりと観光まちづくりは同時に進めていくべきだと思います。

「住んでよし、訪れてよし、そしてもう一度訪れたいくなる」になるようにリピーター率を高めるには、どのような工夫が必要なのでしょう。セッションの最後に、皆さん一言ずつご提案をお願いします。

桑野 今日のシンポジウムのサブテーマにありますように、「9万年の大地で考える」ということは豊後大野だからこそ言えることであり、大変素晴らしいことだと思います。社会教育は確かに難しいことではありますが、学びの場づくりのお膳立てだけは私たちがするという気持ちでやっています。

まちを訪れた人たちが「もう一度訪れたいくなる」ということは、その土地の人に会いに行きたくなることであり、私も、もう一度会いたい人だと言われるようになりたいと思います。

田口 先ほど、若い方たちの神楽を見せていただきまして、豊後大野では若い人たちが地域の歴史や伝統に真摯に向き合っておられることを実感いたしました。多くの方たちが歴史や伝統を自分のことと感じて参加し、継承することを当たり前と思っておられます。ところが、皆さんが当たり前と思っておられることや日常的だと思っておられることは、都会人にとっては非日常であるということを申し上げておきたいと思います。

藻谷 今日の弁当に入っていたサトイモとサツマイモは大変おいしくいただきました。この味は豊後大野の地質が生み出したものです。料理をつくる人は舌で地質の違いが判ります。豊後大野の土に繋がった物語を大事にして、その高い価値を活かしていきましょう。

橋本 まちづくりそのものが訪れていただく方たちの気持ちに添うものになるようにしていきたいと思います。今日は豊後大野のためにいろいろご提案をいただき、ありがとうございました。

加 藤 今日のお話の中で、地域密着型や内発型まちづくりといったご提案がパネラーの皆さんから出されました。豊後大野では、ジオパークやオルレが支えとなってこれまでマイナスだと考えられてきたものがより大きな物語に強化されつつあるという印象を受けました。このシンポジウムの成果を今後の豊後大野の観光まちづくりに活かしていただければと思います。

パネラーの皆様、貴重なご意見ありがとうございました。

テムズ河畔の世界文化遺産を巡って

— 英国世界文化遺産のまちづくり調査 (2014.4.12 ~ 26) 概要その1 —

加藤晃規*

World Cultural Heritages of UNESCO along the Tames River
- Field Survey Series in UK, No.1 -

KATO Akinori

抄 録

英国にはユネスコ世界文化遺産が28件あり、大ロンドン圏内に4件が存在して100万人単位の観光客を集める。テムズ川沿いに立地する2件は中世以降の、アウターロンドンに立地する1件は18～19世紀の王室と市民の関係を象徴する登録文化遺産である。いずれもロンドン特別区(バラ)が保護地区周辺の都市計画について責任を持つ。ウエストミンスター特別区のウエストミンスター大寺院はイギリス風ゴシック様式の代表的作品で、国会議事堂の再生事業に与えた影響(ゴシック・リバイバル)が大きく、3つの構成資産は9世紀にわたる「君主制議会主義」の景観シンボルである。ロンドン特別区にあるロンドン塔はウイリアム征服王以来の王権象徴であり、そのホワイトタワーはノルマン王城として最高傑作、加えてロンドン塔の構築物全体が中世軍事建築を伝える主要な資料である。これらが二つの核となってその後のロンドン中心部が形成されてきた。都心部にありながらも保護地区を守るバッファゾーン(緩衝地)がないが、市街地と対比しながら歴史的景観を楽しむ環境が整えられている。他方、リッチモンド特別区にあるキューガーデンは王室庭園と関連が深く、植物科学や植物交易の成果である豊富な収集標本や、その造園や建築に国外の文化的影響や、W. チェンバースやL.C. ブラウンなど著名な造園家や建築家による19世紀景観庭園の成果が見られる。それら全体は生態学や生物多様性の進展に大きく貢献した遺産である。そこには保護地区の2.7倍の面積でバッファゾーンが設けられ、テムズ川を挟んで隣接する二つの大規模庭園と19世紀末の郊外住宅地が含まれる。その住宅地の保全計画では既存建物の滅失(解体)ができない規定が見られる。

*関西学院大学総合政策学部都市政策学科教授

1. はじめに

英国にはユネスコに登録された世界文化遺産が28件ある。そのうち文化遺産は23件、自然遺産は4件、残り1件は複合遺産である。この登録件数を世界ランキングで見ると、1位イタリア(49件)、2位中国(45件)、3位スペイン(44件)、4位フランスとドイツ(38件)、6位メキシコ(32件)、7位インド(30件)、英国は8位である(2013年統計)。ちなみに日本は13位(17件)になる。英国はこの他に、登録前の国内暫定リストを13件抱えているから歴史文化遺産観光が盛んな国と推察できる。

1970年代になると文化遺産をめぐる世界的なツーリズムの研究が盛んになる。それらでは、訪れる観光客の関心度、理解度、感動レベルとその観光対象との関係つまりゲストとホストの関係に焦点が当てられ、それは複雑で多様であるとする見解が出てくる。たとえば、V.スミス、D.マキャーネル、D.ピアス、P.ボニフェースらの著作では、(i)独自の文化は「ある一定のグループ」にアピールでき、(ii)文化遺産観光の発展にとって文化遺産を支える社会的・文化的構造(ホスト社会の持つ)の理解が必要であり、(iii)それらの理解が観光客(ゲスト)の感動レベルや感動領域を大きく左右し、(iv)ホスト社会の政治構造や社会階層の成熟度により観光名所化のプロセスが決まる、といった指摘が散見される。そして、(v)ホスト社会の「ライフスタイル」が理解されるか否かはゲスト(観光客)の教養次第とする指摘もある¹。歴史文化遺産の価値はゲストの多様な文化を前提にする時代で、世界遺産観光の振興では、遺産物以上にそのコンテキスト(環境文脈と訳されるが筆者はそれを「ものがたり」と解釈したい)の理解・普及に努める必要がある。

これを頭の片隅に置きながら2週間あまり英国を訪問した。調査都市はロンドン、カンタベリー、バース、リバプール、マンチェスター、エジンバラ、グラスゴーの7都市。マンチェスターとグラスゴーはユネスコ歴史文化遺産の登録物件がないが、近代化遺産を活用して都市再生の実績を上げている。他の5都市にはユネスコの登録物件があり、文化遺産観光を都市政策に位置づけている。本論ではこのうちロンドンに関する3件を報告する。

調査では遺産の保護地区(Site)と周辺状況を確認すること、また遺産地区を保護するバッファーゾーン(緩衝地帯)やそこに至る移動空間を確認することも試みた。本論では体験記の記述方法を使い、そのなかで遺産地区の実態を考察している。

2. 中世ロンドンの二つの都市核を巡って

2-1. ウェストミンスター宮殿(国会議事堂)、ウェストミンスター大寺院、聖マーガレット教会地区へ

午前9時ごろホテルを出発し、地下鉄の1日チケットを購入してウェストミンスター駅

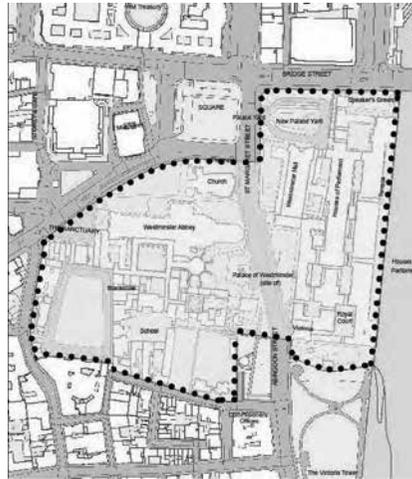


図1. Palace of Westminster and Westminster Abbey including Saint Margaret's church (1987) 遺産保護地区 (注5文献より)



写真1. 左：ウエストミンスター大寺院
右：ウエストミンスター宮殿

へ向かう。下車してテムズ川に架かるウエストミンスター橋に出ると、ビッグベンの勇姿や国会議事堂を撮影する観光客の団に出会う。テムズ河畔の約10ヘクタールの敷地が遺産保護地区に指定され、そこにウエストミンスター宮殿（現国会議事堂）、ウエストミンスター大寺院、聖マーガレット教会の3つのユネスコ構成資産が展開する（写真1）。

ウエストミンスター宮殿はイギリス末期ゴシックの垂直様式、とりわけ15世紀ゴシックを伝える建物である。大火後の1834年に再生事業が始められ、1836年の設計競技でC.バリーとO.W.ピュージンの作品が選ばれ、これに基づいて再建が行われた。英国の立憲君主制や二院制の政治体制を象徴する建物であることから、19世紀イギリスの代表的作品（ゴシック・リバイバル）になっている。先程の橋は、この建物の東面が285mにわたっ

て眺められるヴィスタポイントである。この宮殿北西部に様式の違うウエストミンスター・ホールがあり、そこは議会の前身とされる枢密院（クーリア・レジス）が設けられた場所だ。ここは大火から焼け残り、木造屋根を残す部分に14世紀の姿を読み取れる²。観光客はこちらから入場するが、このホール建築が3つの構成資産の鍵となっていることを後から知った。

一方、ウエストミンスター大寺院（abbey）は、アビーの名称が示すように修道院として創建され、1065年から大寺院としての体裁をもつようになり、1066年以來ここで王位戴冠式が執り行われてきた。中世の修道院はミンスターと呼ばれており、東のセントポール寺院に対してここは西のミンスターつまりウエストミンスターになったという。13世紀の中頃に現在の建物ができ、東西に長い身廊部分、前例のない八角形の参事会堂（チャプタールーム）、そして翼廊に穿たれたバラ窓などから混淆ゴシック様式（イギリス型とフランス型の）の建物とされる³。



写真2. 聖母礼拝堂



写真3. 聖マーガレット教会

このウエスミンスター大寺院へ通常より2割安いシニア料金で入館。中ではほとんどの言語に対応する解説レシーバーが貸し出され、こなたな日本語の説明をききながら見学できた。まずヴォールト天井の高さ（31メートル）とイギリスゴシック様式の装飾で埋め尽くされた壁や床に感動する。そして東端に増築された聖母の礼拝堂（ヘンリー7世礼拝堂とも呼ばれ1519年に献堂）に至ると、繊細で複雑な扇形ヴォールトの天井に息が止まった。専門用語を使えばリブ・ヴォールトの天井がシェル構造のように見える仕上がりである。この礼拝堂の窓面積は大きく、外から見ると外壁はガラススクリーンのように波打っている（写真2）。このため礼拝堂内は異様に明るく、この明るさが天井をいっそう豪華に見せてくれる。この下にヘンリー7世と、異母姉妹のメアリー1世およびエリザベス1世がともに眠るから、ローマン・カトリックとイギリス国教会の確執と共生の歴史を思い浮かべざるを得ない。

今でも寺院内に3,000人以上が埋葬され、600もの墓碑が継承されているという。そのうえダイアナ妃の葬儀やエドワード王子のロイヤルウエディングもここで行われてきたから、現イギリス国民にとっても身近なシンボルだ。寺院は南側にある聖歌隊学校を運営し、博物館や庭園や古文書資料館の機能を果たし、国内から多数の巡礼者を迎えている。コンサートや講演会を開き、カフェも運営するウエストミンスター大寺院。こうした活動から毎年100万人以上が訪れ、その受け入れのために約250人の職員と、多くのボランティアが働く⁴。

2時間ほどで見学を終え、北側に隣接する聖マーガレット教会を訪問した(写真3)。1614年以来コモンズ議会の議員たちに利用されてきた教会で、その伝統から彼らの教区教会の役割を果たしている。しかし今では、ここを訪れる人に神の祝福が降り注ぐことを「目撃する」教会だといわれ、世界中の人に開かれている。ゴシック様式の小規模な建物ながら前述の二つの建物と切っても切れない関係にある。

2-2. 文化遺産の価値

ここで世界遺産地区(サイト, Site)の範囲を確認してみる。ウエストミンスター・ホールと聖マーガレット教会を分ける幹線道路に立つと、北側はベビーカーの家族連れや子供たちが走り回る芝生状の議会広場だ。しかしここは地区外である。南北の幹線道に沿って敷地南端のヴィクトリア塔まで歩くと、聖母礼拝堂の波打つ壁が見える。車の交通量はあっても、歩道が広くて安心して観察できる。この軸線のアイストップを構成するヴィクトリア塔は高い城壁ゲートのようで、その巨大なヴォリュームが訪れる人を圧倒する。塔の南側にヴィクトリア・タワーガーデンつまり公園がテムズ川沿いに展開する。このガーデンも保護地区の外であった。

世界遺産のユネスコ登録では基準の(I), (III), (IV)が採用されている⁵。(I)にあたる価値は、ウエストミンスター大寺院が擁する歴代のイギリス風ゴシック様式の芸術作品を評価する。(III)の価値は、ウエストミンスター大寺院が中世以後イギリス建築に与えた多大な影響、とくに19世紀のウエストミンスター宮殿(国会議事堂)の再生事業でC. バリーとO.W. ピュージンの作品に与えた発展的影響(ゴシック・リバイバルのこと)である。また(IV)では、3つの構成資産が一体で9世紀にわたるイギリス「君主制議会主義」の景観を示すこと、また参事会堂にある王墓や巨大なウエストミンスター・ホール、貴族院議会や下院議会の内部の芸術作品が、英国歴史をリアルに伝える博物館であると評価する。

この保護地区の境界はテムズ川、広幅員道路、広場、公園などに設定されている。南側の一部分だけ域外の建物と連続しているが、そこにバーファーズンはない。周辺の建物群は一様に低く、3つの構成資産を際立たせるような景観であるところから、サイト(敷地)内外で、観光客は安心して歴史的モニュメントを楽しめる。

2-3. ロンドン塔訪問

ウエストミンスター地区をあとにしてタワー・オブ・ロンドン（ロンドン塔）へ向かう。しかしこの途中、セントジェームス公園を抜けてバッキンガム宮殿へ道草をした。途中のバードゲージ・ウオーク通りは街路樹がグリーンアーケードをつくり、その下を騎馬警官やサイクリング車が行き交う。セントジェームス公園は家族連れで満載。樹木が周辺の市街地を遮断してくれるが、バッキンガム宮殿とロンドン・アイだけは池の橋の上から見えている。パーク北側のザ・マル（The Mall はいわゆる商業モールの語源）通りにでると、あたりは翌日のロンドンマラソンの準備や警備体制で閑散としていた。仕方なくグリーン・パーク（そこには有料の日光浴ベンチがなぜか2対づつ置かれていた）を横切り、最寄りの地下鉄駅からコベントガーデンへ向かった。

コベントガーデンは旧市場をショッピング街に再生した繁華街である。その一角で英国式の昼食（フィッシュ・アンド・チップスと黒ビール）をとり、食事後は下り坂をテムズ川まで歩く。川が北向きから東向きに変わる辺りのヴィクトリア・エンバンクメントは格好の散歩道で、観光船の乗り場も多い。ブラックフライアーズ駅まで足を延ばし、地下鉄でタワーヒル駅まで移動する。

ここまでの移動空間は、都市の形成史から言えば中世ロンドンの2つの都市核つまりウエストミンスターとロンドンシティー（イーストエンド）の間の緩衝地である。当然、両者の間には人貨の往来があったであろう。今回は陸上を移動したが、かつてはテムズ川がそれを担ったのである。



写真4. ホワイトタワー



写真5. 左端：新ロンドン市庁舎

タワーヒル駅を出ると白っぽい城壁と古風な塔が現れた（写真4）。世界文化遺産ロンドン塔で、これを保護する目的から川沿いの約7.3ヘクタールが保護地区になっている。緑の空堀りと白い城壁を左手に見ながらチケット売り場に向かう。歩を進めるほどに超近代的なオフィスビルが目に入ってくる。更に進むと、下り坂の向こうに奇妙な卵形をした建物が見えた。テムズ川南岸の再開発で移転してきた新ロンドン庁舎だ。それに続いて

幾重にもガラスビルが建設されて対岸はガラスの城壁になっている（写真5）。文化遺産の入口でロンドン塔と新庁舎がその景観を競っているのである。しかし、石とガラスの強烈なコントラストはむしろ、石造建築物の歴史性を増幅させているようだ。

入場料はシニア料金で1人18.65ポンド（3,300円）と極めて高い。それもドネーションと書いてある。後で知るが、ここの維持管理はHistoric Royal Palacesという慈善団体があたり、政府や王室からの財政援助はない。この独立団体がロンドン塔、ハンプトン・コート・パレス、バンケティング・ハウス、ケンジントン・パレス、キュウ・パレスの5つの文化財の維持管理を担い、そのための活動資金を寄付や会員会費や入場料、そしてボランティアや後援者に頼っている⁶。年間200万人以上の観光客がロンドン塔に来るそうだが、外国からの観光客が相応の入場料を払うのは当然というべきか、それにしても高い入場料である。

2-4. 文化遺産の価値

建築史からロンドン塔の特徴を要約すれば次のようになる。11世紀から12世紀のイギリスでは、ノルマン人により1,200カ所以上の城が築かれている。防御に適した川沿いや平地を選んで小高い丘を造成し、木造の、そして後には石造の城壁と天主閣（本丸）を建設した。丘のふもとに堀を巡らし、本丸へは2階から入る仕組みが一般的であった。この石造時代の城壁や本丸の位置関係から、城壁内の中央に独立した高い（塔状の）本丸を造るタイプ＝tower keepと、そうではなく、城壁と一体的に本丸や一族の居住施設を造り、中央に中庭を設けるタイプ＝shell keepの二種類が見られた⁷。この前者のタイプで現存する最古のものがこのホワイトタワーである。ウィリアム征服王により1080年ごろに完成し、13世紀にヘンリー3世による城壁拡張が行われ、このとき12本の塔をもつ壮麗な城砦に発展した。その後のロンドン塔は、堀の水に囲まれて要塞の役割を果たす一方、巨大なホワイトタワー（幅36m×奥行き32.5m×南壁の高さ27.5m）がロンドン市民を睨みつける役割を果たしたといわれる。

このロンドン塔は城砦宮殿の役割以外にも様々な使われ方を経験した。16世紀末に「Survey of London」を著したジョン・ストウは、政治犯を監禁する牢獄や処刑場であったり、貨幣の鑄造所であったり、兵器庫・食料庫になったり、王室の財宝所蔵庫になったり、また公文書保管庫になった、と報告している。また、ここの主人が国王であった時代もあれば議会派ロンドン市民に取って変わられた時期もある。そうした変遷物語で、チューダー朝末期のメアリー1世が英国をカトリック教に戻し、敵対する異母妹エリザベスをここへ投獄したこと、その後エリザベスは脱出して女王となり、彼女の治世下で反対に、カトリック教徒をここに投獄・処刑したことが伝えられる。王権を巡る争いやロンドン市民の攻撃という歴史物語を経験しつつも、しかし現在のロンドン塔の姿は中世の城砦からほとんど変わっていない。

ロンドン塔の遺産登録にあたっては基準(II)と基準(IV)が取り上げられている⁸。(II)については、ウィリアム征服王の統治以来、この文化遺産は英国王権の象徴的モデルとなり、とくに石造のホワイトタワーは英国内の他の天守閣(keep)建設、例えばコルチェスター、ロチェスター、ヘディンガム、ノリッジ、ワイト島ケアリズブルックなどの王城建設に広く影響を与えた。また(IV)については、ホワイトタワーは防御機能以外の居住機能や礼拝堂を備えた王城で、城壁にもケント州産の石灰岩やカーン産の切り石を採用して豪華な造りがみられ、結果、11世紀以後に登場するノルマン王城のなかで最高傑作であること、さらにはロンドン塔の構築物全体が中世の軍事建築を伝える主要な資料であることが評価されている。

二重に設けられた入場門を入ると、黒地に赤線を組み合わせた制服を着る高齢者があちこちでガイドツアーをしている。彼らは「看守(Yeoman Warder)」の面々であり、14世紀以来ロンドン塔を守ってきた夜警を再現しているという(写真6)。この役職には元軍人が就き、それも一定の位まで出世できた立派な軍人に限られる。その何人かはロンドン塔内に住んでいるらしい。タワーの一部や城壁沿いのアパートらしき建物に住み、ここで1日を送る。教会もあり、芝生広場もあり、住民の子供たちが遊ぶ光景もあり、あたかも小さな村落である。ヨーマン・ウォーダーの数は35人と記録されているが⁹、住民が150人程の時もあったという。にわかには信じられない答えだが、その歴史からすれば、文化遺産を守る防人がボランティアガイドをしても不思議ではない。



写真6. ヨーマンウォーダー

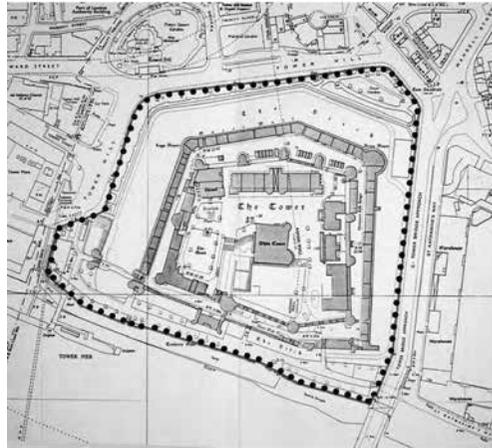


図2. Tower of London(1988)遺産保護地区(注8文献より)

2-5. 中世ロンドンのエリアイメージ

この保護地区の北側と東側は幹線道路で区画され、西側つまりシティー側は冒頭に紹介した広々としたエントランス空間（これは地区外）ができています。南側はテムズ川に接し、保護エリアと水際線の間プロムナードや客船埠頭が展開する（図2）。地区内の主要なビスタポイントから遠くに現代的なビルのスカイラインが見える。同様に前近代様式のタワーブリッジも丸見えだ。バッファゾーンはないが、掘り割りやテムズ川が構成資産を守るバッファ（緩衝機能）になっており、シティーに隣接するわりには歴史的景観を楽しめる。

ロンドン塔の見学後は2階建ての赤バスで帰ることにした。1日チケットが使える便利さもあるが、バスの2階目線からイーストエンドの町並みを観察できるからである。シティー内は目前に建物が迫る狭い道の連続で、移りゆく景観は世界都市ロンドンの高密度な金融街だ。ロンドン大火後に立案されたクリストファー・レンの再生プラン（1666年）が残るキャノン・ストリートを通り、ロンドンっ子の景観シンボルといえるセントポール寺院をかすめ、トラファルガー広場でバスを降りる。このあたりまでくると町の雰囲気が大きく変わるが、ウエスト・ロンドンが始まるのか。改めて、2つの都市核から発展したウエスト・ロンドンとイースト・ロンドンのエリアイメージの差に興味をわいた。

3. 18～19世紀ロンドンの歴史文化遺産を巡って

3-1. キュー王立植物園（通称キューガーデンズ）へ

曇りから小雨になる朝、ディストリクト線でウインブルドン行きに乗り、アールズコート駅でリッチモンド（ロンドン南西部）行きの列車をつかまえた。乗り換えはいつも不安である。同じホームに行き先の違う列車が平然と入ってくるから、掲示板を確認しておかないと反対方向に連れて行かれる。とくに都心からアウター・ロンドンへ出かける場合が危ない。今回も、南西14キロメートルのリッチモンド・アポン・テムズ特別自治区（ロンドン・バラ）まで出かけるツアーが、危うくそうなるところであった。

列車がテムズ川を渡ってキュー・ガーデンズ（Kew Gardens）駅に着いた頃に雨もあがり、太陽が射して来た。駅前に大きな案内看板があり、周辺の地図と簡単な説明が書いてある。「王立植物園ようこそ。ここから10分程で世界最大の生きた植物コレクションがあります。そして、ヴィクトリアン・パーム・ハウスなど6つの温室建築をはじめ英国登録文化財である建造物が40棟以上（実際は44棟）保存され、園全体が歴史的景観を造り出しています。この世界文化遺産の敷地で、砂漠や海や山から集められた植物を探求し、豊富なイベントに参加し、豪華なレストランで食事を楽しんで下さい」とある。まるでピクニック公園の案内だが、テムズ川右岸に登録敷地面積132ヘクタール、バッファゾーンの面積350ヘクタールで展開する王立植物園キューへの誘いである。



図3. Royal Botanic Gardens, Kew (2003) 施設配置概要図と駅前住宅地 (駅前案内看板より)

3-2. 三つのビスタを持つ景観庭園 (図3)

駅前住宅地の突き当たりに見えるヴィクトリア門から入場。老人料金 (Concession) でも £14 (約 2,500 円) で、意外に高い。まず池の前に建つパーム・ハウスへ直行し、内部のジャングルを見学 (写真7)。世界最大の実を付けるココナッツヤシや 1775 年からあるソテツが見もので、鉄とガラス (約 16,000 枚) の建物がそれらを覆う。この建物は 1844 年から 4 年をかけて、R. ターナーと D. バートンが完成させているが、前面の池に建物の倒立像が映り込むことを想定して形や材料が決められた。それは、ロンドン博覧会 (1851 年) に出品された J. パクストンの水晶宮に通ずる、当時の先端的建築様式だ。

この建物からテムズ河畔まで一直線に伸びるサイオン・ビスタ (Syon Vista) がある

(写真8)。このビスタ(目通し線)の長さは約800メートル、終点まで来ると対岸にサイオン・ハウス(ノーサンバーランド公爵の旧邸)が見える。同様に、パーム・ハウスから南方向へパゴダ・ビスタと呼ばれる軸線がある。その終点は、10階建て高さ50メートルのパゴダ建築(1762年建設)で、このパゴダまでの距離は約850メートル。そして、このパゴダとサイオン・ビスタの終点は第3のシダー・ビスタ(Cedar Vista)で結ばれている。その距離も約850メートル。つまり、景観庭園は、その中心がパーム・ハウスで、これを頂点とする正三角形の各辺に3つのビスタが設けられていることになる。遺産保護地区の南半分はこの骨格のもとに展開しているのである。

この土地の形状区画は複雑な経緯をたどっているようだ。元来、二つの庭園が別々にあり、西側半分がリッチモンド庭園、東側半分がキュー庭園であるが、それぞれの庭園に造園家が雇われていた。それが一体化され(1772年)、間に設けられていた壁が取り払われてくると(1802年)、19世紀中頃から造園家W.ネスフィールドを中心に庭園の改造が進み、二つの大温室(パーム・ハウスとテンペレイト・ハウス=温帯域温室)を焦点とする庭園構成が出来上がってくる¹⁰。

パゴダ・ビスタ沿いにテンペレイト・ハウスへ行ってみる。途中のチェリー・ウオークゾーンに立寄ると、日本語らしき「マツマエ ハナグルマ」「マツマエ Mathimuzakura」「シロフゲン」「タキニオイ」「アサノ」と記した桜木に出会う。その数と種類の豊富さにビックリしながらテンペレイト・ハウスに到着。それは園内最大の建物で、パーム・ハウスと同時期に完成している。長方形平面の温室が3棟、それらの間に八角形平面の温室が2棟、これらが一直線に並んでいる。南北180メートル以上ある温室は容易にカメラに収まらない。仕方なく近づいてみると、建物はかなり痛んでおり、その修復のために植物も引越していた。2018年に戻ってくるそうだ。

中国風パゴダをみた後は、シダー・ビスタを横切りながら敷地南端のジャパニーズ・ゲート(寺の勅使門を模した門構え建築で1991年建設)やシャーロット女王の田舎小屋(18世紀中頃の建設)に立寄る。この辺りは園内に三つある森林植物ゾーン(アルボレタム)の一つだが、樹林保護エリアでもあり(少し荒れていた)、その中でメギ科の低木やブルーベルの青い花壇、あるいは和風庭園や草葺き屋根が園路のアクセントになっていた。

シダー・ビスタに戻ってテムズ河畔にいくと、急に視界が開けてサイオン・ハウスが見える。ベンチで休憩する人、堤防沿いの道をサイクリングで走る人、その姿を写真に収める人、まさに遠景を眺めるビスタ・ポイントだ。この近くの池を巡り、その先(東側)に二つ目の森林植物ゾーンがあると言うので行ってみると、空中高く樹上回廊(Treetop Walkway)が造られており、家族連れが黄色い声を掛け合っている。キュー・ガーデンは19世紀中頃つまり大温室を完成させた頃から植物標本の収集や研究、とくに資源植物の交易に力を入れはじめたとされる。そのためのハーバリウム(Herbarium、植物標本室)

を設立し、マレーシア、インド、スリランカなどと植物交易をした¹¹。そうした背景を考えると、この回廊がマレーシアのタマン・メガラ国立公園内にみる樹上回遊路に繋がった。

Uターンをしてサイオン・ヴィスタを横切り、森林植物ゾーンをさらに北へ進むと竹林や日本民家(2001年移築建設)に出くわした。かなり立派な民家で、1900年ごろ東京近郊で建てられたものを移築したという。そして、その先にロードデンドロン・デル(Rhododendron Dell, シャクナゲ, ツツジ等を植えた小さな谷)があった。この花言葉は「威厳」だ。イギリス式庭園にはこのロードデンドロンを使った園芸庭園は多いが、ここもW.ネスフィールドの改造後にできたといわれ、鮮やかな色がアルボレタムの景観を大きく変えていた。これを眺めながら園路を北にとると次第に疎林状態になり、芝生部分も増えてあたりが明るくなった。森林植物ゾーンを過ぎたのか、これまでと雰囲気が違う。地図をみるとほぼ半分の踏破した勘定で、3キロメートル以上を歩いている。さすがに疲れたが、そのまま植物園北側の探索を続けることにした。

3-3. 遺産敷地の北側エリアへ(図3)

テームズ川沿いの道から入るためにブレントフォード・ゲートが用意されている。隣接するハンズロー・バラ(特別区)の町名からその名を採っている。ゲートが面する川沿いの道は昔の曳船道であり、テームズ川を来た王室貴族たちはキュー埠頭で船を降り、敷地北端にあるエリザベス門やこのブレントフォード・ゲートを使ったに相違ない。今ではゲート前に駐車場があり、門を入ると様々な施設、宮殿や小さな温室、図書館(ハーバリウム)さらにはレストランやカフェや子供の遊び場が散見される。要するに便民施設が集積するエリアといえる。その中で赤い建物と白い建物に目を惹き付けられた。

赤煉瓦の建物つまりキュー・パレスは前述した二つの門の間にある。英国内で最も小さな王室宮殿といわれ、そこにジョージ朝王室の生活展示が見られる。3階建て+屋根裏階からなる宮殿は、3階が婦人の生活ゾーン、下階は晩餐食堂や主人の執務室と生活ゾーンで、当時、階別による生活機能の展開があった事がわかる。

キュー・パレスと呼ばれる建物が文献上、3つ存在する。エリザベス女王1世の頃のもの第1世代とすれば、第2世代は1631年にフレミッシュ・スタイルの破風(軒先)で建てられた現在のものだ。その様式からダッチ・ハウスと呼ばれた。そして、第3世代は建物の絵だけが残り、ジョージ3世下にゴシックスタイルで建設され(1802年)、1823年に解体されたという。しかし何処に建っていたのか定かでないという¹²。

第2世代の宮殿は、以前、キュー・グリーンつまりエリザベス門の前に残る空地に建っていた。1781年、ジョージ3世がこの旧キュー・パレスを買い上げて王室の子供たちの養育施設にしている。そして後に、現在の場所に移された。兎に角この辺りの不動産の所有者や借地人は複雑に変遷してきているから建物の歴史も奥が深い。とりわけキュー・パレスの現在位置は興味深く、パーム・ハウスの南北軸を北に延ばすとほぼ現在の宮殿に当

たる。繁茂する樹木で両者が見合うことはないが、明らかに関連づけられている。

一方、白い建物は噂のオランジェリー（W. チェンバース、1761 年作）だ。半円アーチを乗せる大きな縦長窓が連続するファサードで、まさにジョージアン・スタイルである。呼び名のとおり柑橘植物の温室として建設されたが、現在はレストランになっており、この用途が世界遺産としての登録資格に陰を落としているという。

さらに北東へ進むと、老舗の温室「ナッシュ温室」(J. ナッシュ作、1836 年にバッキンガム宮殿から移築)がある。その破風面はギリシャ風だが、長手方向の壁が柱列形式で造られ、柱間は大きなガラス窓なので温室であったことが読み取れる。現在は教育センターとあるが、セミナー会場程度の利用だろう。

最後に、敷地の北東部を探索する。ウエールズ王女の温室 (Princess of Wales Conservatory, 1987 年開設) やデービー・アルパイン・ハウス (Davies Alpine House) へくると、超現代的なデザインの温室があった。これらを第二次改造時の精神を受け継ぐ新たな創造だといえば褒め過ぎかも知れないが、温室建築に関する伝統と革新を見るには好例であろう。このうちアルパイン・ハウスでは 2,000 メートル級の山に咲く高山植物が集められ、チリ産ブルー・クロッカスなど珍種が貝殻状ガラス屋根で覆われている。背丈の低い植物が背の高いガラス屋根で守られる意味をよく理解できないまま、盆栽ハウスと書かれた場所を探し始めた。結局、発見できなかったが、この辺りは小さな園路に沿って様々なテーマの花壇が続くゾーンで、その展示植物も変わることもあるそうだ。他へ移されたのかも知れない。

仕方なく岩の多い地形に育つ植物を集めたロック・ガーデン (Rock Garden) へ、そしてこれを抜けてウッドランド・ガーデンへ向かう。そこも第3の森林植物園ゾーンで、おそらくキュー・ガーデンの古い姿を残す部分であろう。トロス (円形のギリシャ建築) の形をした小さなモニュメントが建ち、ギリシャ神話にでてくるアイオロスの神殿と名付けられている。近くにユキノハナ (Snowdrop) が植えられていた。

ウッドランド・ガーデンの隣にはミュージアム No.1 (1857 年開館) がある。そこに人間が植物に依存してきた歴史を示す標本が集められ (7 万点あまり)、中にはヒーリング効果やエネルギーをもたらす植物、あるいはラムゼス 2 世の棺から発見されたというリースの破片など、珍物も多い。本来のハーバリウム (標本資料室) は敷地北端の図書館 (1903 年、1932 年の 2 度にわたり拡張) で、そこに膨大な収集資料が保管されているが、この図書館は研究者専用ということで一般に開放されていない。開放されているという意味でこのミュージアム No.1 が唯一の博物館だ。そして、この建物は池を挟んでパーム・ハウスと対峙する。しかもパーム・ハウスとサイオン・ピスタの軸線にピッタリ乗っているのである。庭園全体を覆う 18 世紀、19 世紀の造園技術と精神はここでも確認された。

3-4. 文化遺産の価値

そもそもキュー植物園は1759年、オーガスタ妃と時の政治家ビュート卿が、葉草を育てるために4エーカー（1.6ヘクタール）の植物園を設けたことに始まる。おそらく敷地北東部の一角であろう。ところがこの地域は静養に適した場所であったことから宮殿併設の庭園としても活用され、これに合わせて品種改良や資源植物の収集拠点になってくる。18世紀末に、まだ2つに分断されていたキュー・ガーデンとリッチモンド・ガーデンで第一次の庭園改造が進む。このとき活躍したのがC.ブリッジマンやW.ケントやW.チェンバースらの造園家であったとされる。とくにチェンバースは造園技法のひとつ「シノワズリ（中国趣味）」をリバイバルさせ、アングロ・チャイニーズという庭園様式を編み出し、イギリス国内や大陸に普及させた¹³。

19世紀になると2つの王立庭園は一体化し、1840年に国立の植物園として改組される。そして国による植物学や園芸学の研究活動拠点へと性格を変えてくる。世紀中頃には先に述べたような新しい温室建築や造園技法が展開され、従前の王立景観庭園に対して第二次の改変が進む。このとき活躍したのが造園家W.J.フッカーやW.ネスフィールド、建築家R.ターナー、D.バートンらであった。20世紀になると研究センターや保存センターの性格が更に進み、環境生態や生物多様性の保護のために、収集標本や植物園の遺産を守る拠点になるのである。

このサイトの世界文化遺産登録では基準の(II)、(III)、(IV)、が採用されている¹⁴。(II)については、王立植物園が18世紀以来、世界の植物学や植物交易の分野で多くの交流実績をもち、それらが収集標本の豊富さにみられること、そして、園内の造園要素や建築群にヨーロッパ大陸や更に遠隔地の芸術的・文化的影響が見られること、である。(III)は、多くの科学研究分野とくに植物学や生態学の進展に当園が大きく貢献した証拠、である。(IV)は、著名な造園家や建築家による優れた景観庭園であること、とくに、チャールズブリッジマン、ウィリアム・ケント、ランスロット・ケイパビリティー・ブラウン、ウィリアム・チェンバースらは世界的な影響を与えており、その初動期を示す作品が集積する点である。

3-5. 遺産の消滅を許さないバッファゾーン

ゲートを出てバッファゾーンの実態を確認することにした。保護地区は高い塀で仕切られ、この塀に沿ってキュー・ロードが通り抜ける。この道に面して赤レンガやアースカラーの2～3階建て低層住宅が並ぶ（写真9）。住宅地一帯に戸建て住宅、2戸1住宅、共同住宅が建つが、4階以上の建物は見当たらない。アースカラーの壁はジョージアン・スタイル、黒っぽい黄色はロンドン土着様式、赤色はビクトリアン・スタイルと、壁の色で住宅類型を整理でき、それらが通りごと（ストリート・ワイド）でまとまっている。比較的ヴォリュームの大きい戸建て住宅が多いが、日本的に言えばおそらく100%程度の容積率であろう。要するに建物高は低く、道沿いに統一感のある住宅地が展開し、それがバッファゾーンに取り入れられている。



図4. 19世紀中頃の古地図
(A vision of BRITAIN THROUGH TIME より)

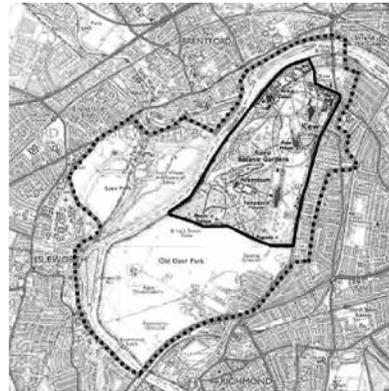


図5. Royal Botanic Gardens, Kew
遺産保護地区とバッファージーン (外側)

1856年以前の古地図(図4)、植物園の第二次改造前と推定できるが、それにはこの住宅地が描かれていない。キュー・ロード沿いにわずかに家が見られるだけで、あとは完全な空地だ。ところが1903年の地図では区画道路と市街地が描かれている。鉄道線もある。どうやらここは、19世紀末から20世紀初頭にかけての住宅地である可能性が高い。

これ以外に3つの要素がバッファージーンを構成する(図5)。南側のオールド・ディアーク・パーク(Old Deer Park, 147ha)、これはリッチモンド・アポン・テムズ・バラ(特別区)にある王室御料地(Crown Estate)である。他はテムズ川(面積不明)とサイオン・パーク(80ha)で、後者はテムズ川を挟んでハンズロー・バラ(特別区)に属する。オールド・ディアーク・パークは現在ゴルフ場や運動公園になり、その一部にキュー天文台(1769年設立、英国第一級歴史建造物)がある。サイオン・パークは前述したように歴史的庭園だ。いずれも遺産敷地自体の面積に引けを取らない広さがあり、登録構成資産の価値を保護するだけでなく、むしろ高める内容である。

これらバッファージーンの保全的都市計画は特別区(ロンドン・バラ)の業務である。後日、リッチモンドのローカル・プランを調べると、バッファージーンのプロテクトは7つの保存地区に分けられ、地区特性に応じた建築規制を行っていた。とりわけ住宅地に関しては外観やフェンスの変更がほとんど不可能で、とくに既存建物の滅失(解体)ができない規定がある。まさに遺産の消滅を許さない姿勢である¹⁵。

キュー・ガーデンズからの帰りはディストリクト線でハームズミス駅まで行き、乗り換えのためここで一旦改札を出た。周りを見るとヨーロッパ系、アジア系、アフリカ系、アラブ系と様々な人種がいる。顔つきも別々、服装もまちまち。半袖で素足の人がいるかと思うと、ダウンコートにブーツの人もある。そして自分の服装こそ一番快適だという顔をして歩いている。ロンドンは多様な価値が共生できる街なのだ。

注

1. Priscilla Boniface & Peter J. Fowler(1993),”*Heritage and Tourism in the ‘global village’*”
Routledge(London), pp.3-5.
2. 日本建築学会編 (2005)『西洋建築史図集三訂版』彰国社, 168 頁.
3. 日本建築学会編 (2005), 前掲書, 161 頁.
4. Dean & chapter of Westminster(2013)『ウエストミンスター寺院ショートツアー』*Scala Arts & Heritage Publishers*, 30 頁.
5. UNESCO World Heritage Center,”*Palace of Westminster and Westminster Abbey Including Saint Margaret’s church*”, [http:// whc.unesco.org/en/426](http://whc.unesco.org/en/426).
6. Historic Royal Palaces(2011)『体験ツアー Tower of London』, *Historic Royal Palaces (Surrey)*,13 頁及び 72 頁.
7. 日本建築学会編 (2005), 前掲書, 166 頁.
8. UNESCO World Heritage Center,”*Tower of London*”, [http:// whc.unesco.org/ en/488](http://whc.unesco.org/en/488).
9. Historic Royal Palaces(2011), 前掲書, 16 頁.
10. UNESCO World Heritage Center,”*Royal Botanic Gardens,Kew*”, [http:// whc.unesco.org/en/1084](http://whc.unesco.org/en/1084).
11. 12. 13. 14. UNESCO World Heritage Center,idem.
15. [http://www.Richmond.Gov.uk/home/planning/ Conservation Area.htm](http://www.Richmond.Gov.uk/home/planning/ConservationArea.htm).(2014.4.16.up)

観光都市奈良の発展に関わる 仏像鑑賞の意識変化

— 岡倉覚三と和辻哲郎との連続性から —

北廣麻貴*

Development of Tourism in Nara and Changes of Minds
in the way of Appreciation of Buddha Statue
-Cases of Okakura Kakuzou and Watsuji Tetsurou-

KITAHIRO Maki

奈良県は、多くの観光客が訪れる日本の観光地のひとつであり、寺社仏閣ひいては仏像の鑑賞は、奈良の観光都市としての性格を支える重要な要素である。

本稿では、観光都市奈良の性格であり、現在では一般化している仏像を鑑賞するという意識の形成と文化人の語りの関連を考察することにある。

奈良県が観光都市として発展し、仏像の鑑賞が観光目的のひとつとなった文脈には古社寺保存法の制定¹、鉄道の整備²、世界文化遺産への登録³など様々な要因があるが（遠藤，2005）、本稿では文化人の語った奈良、特に東京帝国大学で行われた岡倉覚三の講義「泰東巧芸史」と、その講義を受講していた受講生の回想記による語りの連続から仏像を鑑賞するという視点について注目し考察をすすめる。

奈良を語った文化人は多数存在するが、本稿では奈良の印象記という位置付けである『古寺巡礼』に着目したい。『古寺巡礼』は、1918年（大正7）に著者の和辻哲郎が友人とともに奈良を訪れた際のものであり、和辻の自由な発想に基づき奈良を捉えている。しかし、個人的な見解のみではなく、様々な影響を内包している著作だといえる。和辻が受けた周囲の影響のなかのひとつとして、1910年（明治43）に東京帝国大学で行われた講義「泰東巧芸史」が浮かび上がった。岡倉の講義は和辻にとって印象深いものであり、仏像を鑑賞するという視点を与えた。『古寺巡礼』の執筆にもその影響が及んでいると考えられる。その『古寺巡礼』によって人々が奈良へと導かれたことから、観光都市として奈良が発展する文脈の中で、文化人の語りを検討する必要があると考えた。

1. 一般化する美的対象としての仏像

奈良を訪れると様々な仏像を拝観することができ、それが人々の観光目的になっている

*同志社大学大学院社会学研究科

ことは旅行案内書やパンフレットに少し目を通してだけでも明らかである。

中谷（2001）が実施したアンケートによると、今後の奈良にとっても期待ができるという回答が得られた項目は上位から順に寺社仏閣などの「伝統的な文化財」が71.2パーセント、山や川といった「自然とのふれあい」が61.4パーセント、博物館や美術館などの「文化施設」が60.7パーセントであった⁴。仏像を含む伝統的な文化財は人々の期待する奈良の要素であることがわかる。

このような結果は特殊なものではなく、別の調査でもみられた。「奈良県観光の実態調査」報告書⁵によると、奈良の魅力について尋ねた結果（複数回答可）、上位から順に「古社寺史跡が多い」が81.8パーセント、「文化的香りがする」が43.6パーセント、「自然環境がよい」が41.9パーセントであった。ここでも、奈良の魅力が寺社仏閣またそれに付随する文化財にあると意識する人びとが多いことが理解できる。

さらに、寺社仏閣に対する意識を調査した結果（中谷，2001）⁶によると、奈良の仏像が鑑賞の対象として位置付けられていることがわかる。この調査では、(1)「奈良で寺や神社へ行くと熱心に拝む」か、(2)「観光の時以外にも、普段から寺や神社に参拝する」か、(3)「奈良の仏像は信仰の対象ではなく、鑑賞の対象である」という質問項目が設けられている。(1)(2)については、普段から社寺に参拝する人は約半数であり、さらに奈良でも熱心に拝む人も約半数いるという結果がでている。しかし、(3)の結果を参照すると、仏像を鑑賞の対象と捉えている人びとは約8割にのぼった。

以上の調査結果に現れた仏像が鑑賞の対象であるという意識は、現在書店で販売されている旅行案内書でもきわめて自然に現われている。例として本稿では、奈良県にとって大きなイベントであった平城遷都1300年祭が開催された2010年（平成22）に出版された旅行案内書の一部を参照したい。JTBパブリッシング（2010）『奈良 大和路‘10～‘11』には綴じ込み付録として「仏像入門と奈良の仏たち」と題した冊子が付いており、国宝や重要文化財である奈良に関する仏像が掲載されている。解説の文章の多くは仏像の本来の姿である信仰の対象に関するものが多く、現在、仏像の目的が鑑賞されることに限定されてしまっているわけではないということを確認したうえで、本稿では鑑賞という視点による解説が掲載されていることに着目する。

例えば、興福寺の国宝阿修羅像の解説には「……異形を感じさせない全体の造形美が見事」という記述や、聖林寺の十一面観音立像については「脚が長く、右手の指の姿も美しい」という記述がみられる。

このような見方は例えば旺文社（2010）『マップルマガジン 歩く奈良大和路』でもみられる。阿修羅像を紹介する箇所では、「もとは戦いを好む悪の戦闘神だったが、釈迦の教えにひかれ守護神に」というように仏像としての特徴が述べられていることに加え、6本の腕に関しては「伸びやかで美しい」、また像高に関しては「阿修羅像としては珍しく、

すらりとした小柄なスタイルは少女を思わせる」という解説がみられる。ここでは、6本の腕に対して美しい、またすらりとしたスタイルといったような宗教的な視点とは離れた見方に注目する。他にも、法隆寺の百済観音像は「日本の仏像には珍しい、ほっそりと優美な八頭身。慈悲深い表情が多くの人を魅了する」といったように、美しい、優美という言葉で表現されている。これらの表現は決して特殊なものではなく、例として挙げた2冊以外の旅行案内書でもみられる表現である。

このように仏像を美的視点で鑑賞することは、近年一層関心が高まった阿修羅像の展示にも当てはめることができる。阿修羅像はこれまでガラスケースに収納されていたが、興福寺・国宝館のリニューアルに合わせてガラスケースを取り払い、直接鑑賞ができるようになってきている。これは、2009年（平成21）年3月31日から6月7日に東京国立博物館、2009年（平成21）年7月14日から9月27日に九州国立博物館で開催された興福寺創建1300年記念「国宝 阿修羅展」、その後興福寺仮金堂、北円堂で2009年（平成21）10月17日から11月23日まで開催された「お堂でみる阿修羅展」⁷の好評を受けた鑑賞方法である。「国宝 阿修羅展」では阿修羅像を正面からのみではなく360度、鑑賞者の好きな角度から鑑賞できる点も話題となった。

このように、今日、仏像を美的視点から鑑賞するという見方は一般化し、当然の意識として人々に受け入れられている。ところがその意識は歴史的に形成されたものであり、ひとつの要因として文化人の語りがあると考えられる。

2. 仏像鑑賞の意識変化における『古寺巡礼』

文化人の語りから、仏像を鑑賞するという意識を検討する際、和辻哲郎が著した『古寺巡礼』は見逃すことのできない著作である。

『古寺巡礼』は、1918（大正7）年5月に、和辻が友人とともに奈良県内の様々な場所を巡った際の様子を記した「印象記」であり1919年（大正8）に岩波書店より出版されている。1947年（昭和22）に出版された『古寺巡礼』の改定版の序章において和辻は、この著作について、「……二三の友人とともに奈良付近の古寺を見物したときの印象記」であり、学問の書ではないと述べている（和辻、1947：1）。

そのような『古寺巡礼』は現在でも多くの人々に読まれている著作であり、先行研究を参照すると、奈良について検討する際に非常に重要な著作であるといえる。例えば、小川（2007）は「文字化された表象は、その内容が解釈の所産そのものであり流布も容易であるために、影響力は非常に大きく、再解釈の対象となりやすい」と述べ、その例が『古寺巡礼』であると指摘している。他にも「……『古寺巡礼』が“故郷の廃家”に寄せる洋式の郷愁⁸を世人に教えた」（永島、1971：243-244）という記述や、「……『古寺巡礼』が、

その後の奈良ブームの火付け役になった」(和田萃他, 2003), 『古寺巡礼』の評判が「実に日本の仏像鑑賞史の前衛をなした」(矢代, 1960) という記述を確認することができる。

さらに、和辻以降『古寺巡礼』という題名の書籍が多く出版されている⁹。例えば亀井勝一郎『大和古寺風物誌』や白洲正子『私の古寺巡礼』は、和辻に影響を受けたといえる点があり、この事実からも和辻が人々の意識を変化させるきっかけとなったと考えられる。

ところが、観光都市奈良の発展文脈において大きな役割を果たしてきた『古寺巡礼』による奈良の捉え方は、和辻が新たに見出したものではない。和辻が仏像や寺社仏閣を美術的視点から捉えるという見方には、時代の流れや教養といった周囲の影響が大きく関係していると考えられる。奈良の仏像や寺社仏閣を美術の視点から捉えるという和辻の見方に関しては、「……言うまでもなく、フェノロサなどによって明治中期に日本に広められた『ヘレニズム東漸』の物語である」(魚住, 2013: 65) という指摘にもあるように、和辻が発端ではなくアーネスト・フランシスコ・フェノロサによるものであることは周知の事実である。フェノロサの業績は日本の美術史に多大な影響を与えたといえ、和辻もそのような影響を受けていると考えられる。実際に『古寺巡礼』において和辻はフェノロサと法隆寺の夢殿観音について指摘をしている¹⁰。

以上をふまえたうえで、本稿では和辻と岡倉の関連に焦点をあてたい。なぜなら、和辻は東京帝国大学在学中に岡倉の講義「泰東巧芸史」を直接受講し、その影響が『古寺巡礼』へと及んでいるといえるからである。岡倉の影響を内包した『古寺巡礼』が現在の観光都市奈良の発展文脈にひとつの要因を与えている。次章以降、和辻との関連から岡倉の講義について検討を進める。

3. 「泰東巧芸史」と手がかりとしての回想記

「泰東巧芸史」¹¹は、1910年(明治43)の第3学期、4月から6月までの1学期間、1週間に1回、また講義時間は2時間として開講された¹²。この講義を、和辻哲郎をはじめ、児島喜久雄、香川鉄蔵、黒田鵬心、内藤堯宝ら様々な人物が聴講している。

岡倉の第1回目の講義は4月19日に心理学教室で開講され、時間の都合がついた者や卒業生までが教室に集まっており(香川, 1966)、岡倉の講義に対する期待を推測することができる。

様々な経緯の末(井上, 1925・宮川, 1968・清見, 1980)、開講するに至った岡倉の講義「泰東巧芸史」は、岡倉自身が講義内容に関して執筆した書籍は存在せず、受講した生徒が講義内容を筆記したノートと講義のために岡倉が執筆した講義メモのみが残されている¹³。

「泰東巧芸史」が開講された心理学教室については、和辻と香川の記述より確認することができる。岡倉の講義は第3学期に行われているが、その前である第2学期には京都帝国

大学文化大学から瀧精一が兼任教授として日本絵画史を講義している。その際講義室として心理学教室が使用されたのは幻灯を使用する場合に窓に黒いカーテンを張るためであったという（香川，1966・和辻，1950b・1959）。瀧の講義では幻灯が使用されていたが、和辻によると、岡倉はおそらく講義で幻灯を一度も使用しなかったと述べている。しかし、実物を用いたことはあるという（和辻，1959：215）。

後年児島君自身から云われて、そんなこともあったかと思ったのは、岡倉覚三先生の美術史の講義で、先生がシナの鏡かなんかを持って来て聴講生に見せられた時、私がそれを無雑作に取上げて眺めようとしたので先生が、そんなに乱暴な見方をするものではない、こういうものはこうやって見るのだと云って、丁寧に品物の扱い方を教えられたというのである（和辻，1950a：56）。

これは、実物を見ることの重要性を受講生に伝えるという岡倉の方針が垣間見られる回想である。

1学期間のみ講義であったにも関わらず、「泰東巧芸史」についての回想記は少なくはない。回想記は、岡倉の全集出版の際に書かれたものや、岡倉の追悼記として書かれたものが大半を占めるが、講義の印象が強かったことは否定できないであろう。

受講生が残した岡倉の講義の様子については、「それは理想主義の観点に立ってよく要点を捉え、感銘甚だ深いものがある」という言及がみられる（清見，1980：289-290）。この印象を語った者が誰であったのかは明らかにされていないが、このように「泰東巧芸史」について言及をしている者は多く存在する。

内藤堯宝は、院展に出品された下村観山作の「天心先生」の所感として、自身が受講していた岡倉の講義について以下のように言及している（内藤，1922）。

……和服を着し靴をはき、巻紙に筆で書き附けた草稿を持って来て教壇に立つや先ず頭髪のもじゃもじゃした恐ろしい顔でにらみ付け、齒をむき出して、おもむろに訥弁ではあるが力の籠った人を引き付ける様な声で講義をしてくださったことが記憶に残って居る。

「……頭髪のもじゃもじゃした恐ろしい顔でにらみ付け、齒をむき出して……」という箇所を想像すると恐ろしいが、講義後には岡倉の周りに何人かの受講生が集まっていたことや、講義外の時間に岡倉が受講生の一部を連れて帝室博物館を訪れたという話も存在することから（香川，1966）、岡倉は決して近寄りがたい人物ではなかったように思われる。

黒田鵬心も岡倉とその講義について回想している。黒田は、読売新聞に鵬心生という名

前で「オノト雑記」と題した連載を行っており、該当箇所である記事は1913（大正2）年9月7日日曜日発行の読売新聞の日曜付録に掲載¹⁴されている。

而して先生の講義ぶりは、実にキビキビしたもので、人格的講義というような名をつけ得るものは、文科大学三年間の内唯先生の講義あったのみである。

学生が其の講義の片言隻語も逃すまいと筆記するを見て、「そう書かれては困ります、書かずに聴いてください」と、先生は黒板に表を作られる。

僅かに一週二時間一学期で、漢時代から現今まで、支那、朝鮮、日本をひっくるめての講義であったが、極めて頭のいい表の幾つかで、的確な知識が得られた。

講義の筆記に関して、香川（1966）も、岡倉の講義は受講生のノートをとる力を超越したものであり、その語調と表情に魅せられ、周りの受講生もペンを握ったままノートをとることができていなかったと述べている。そして、岡倉が黒板に漢土の地名や人名を字格正しく書く時のみノートに写し取ることができたという。さらに、黒板に書かれた内容と岡倉が講義のために作成したメモは同一内容ではなかったことがわかる¹⁵。香川はこの経験から、「われわれが先生の講義を筆記するのは愚かしいことである。先生を凝視し、全身をぶちあててただただ聴いて居るほか何もできなかったのである」（香川、1966）と述べている。

このように、本稿で回想記を用いている理由は、今日出版されている「泰東巧芸史」と「泰東巧芸史メモ」のみでは、講義の具体的内容以外について検討し難いといえるからである。

例として、支那の玉器に関する部分について挙げると、「泰東巧芸史」の中では「玉器は触覚に快きもの。殊に古代支那社会に愛重せらる（岡倉、1980a：270）」といった記述が残されている。しかし、和辻の回想を辿ると以下のように述べられている。

支那の玉についての講義の時に、先生は玉の味が単に色や形なくして触覚にあることを説こうとして、適当な言葉が見つからないのかのように、ただ無言で右手を挙げて、人さし指と中指とを親指に擦りつけて見せた。その時あのギョロリとした眼が一種の潤いを帯び、ふてぶてしい頬に感に堪えぬような表情が浮かんだ¹⁶。

このように、受講生の回想を参照すると、「泰東巧芸史」および「泰東巧芸史メモ」のみでは推測することができない講義の様子を検討することができる。

杉山（1980）は、岡倉が黒板に描いて示したとされるスケッチから、岡倉は文字や概念よりも美的感動を伝えたいといった意思が伝わったことを述べている。また、和辻の回想からも、岡倉の講義は美術品についての事実に知識を伝えるのみではなく、美術品を見

る視点と鑑賞方法を論じたことが特徴であったことがわかる（和辻,1936a）。

4. 岡倉の発言による刺激と和辻への連続

本章では、多数の受講生のなかでも、さらに和辻に焦点を当てて考察する。『古寺巡礼』の著者である和辻もまた、これまで検討してきたように、他の受講生と同様、学生時代に受講した岡倉の講義から強い刺激を受けている。

岡倉の講義について和辻は、「自分の学生時代に最も深い感銘を受けたものは、この講義¹⁷と大塚保治先生の『最近文藝史』とである」と述べている¹⁸（和辻,1936a）。

和辻の回想で興味深いものは、講義での岡倉の発言である。岡倉は、和辻たち受講生に向かって薬師寺に行ったことのない者はいるかと問いかけ¹⁹、そのような人は心の底から羨ましいと述べている。続けて岡倉は以下のように発言し、和辻は強い刺激を受けている。

その時に先生の言われたことは、大体次のようであったと思う。「わたくしは若いころ初めてあの像の前に立った時、実に何とも言えない強い驚きを感じた。あの大きい、まっ黒に光っている本尊の、あの渾然とした美しさが、雷電のようにわたくしを打ったのであった。この最初の印象がわたくしには非常に強い感銘を残している。あの本尊はその後別に美しさを感じたわけではないが、しかしあの印象は一度だけのものである。もしあの時のような気持ちをもう一度経験することができるならば、そのためにわたくしは何を失っても惜しいとは思わない。しかるに諸君は、これからあの気持ちを経験することはできるのである。それを羨まずにいられようか」。

そう言って、岡倉先生は実際に感慨無量というような表情を浮かべた。…わたくしたちは右の言葉から異常に強い刺激を受けたのであった（和辻, 1959: 215-216）。

岡倉が講義で述べた以上の言葉は、和辻による他の文章でも言及されている。より詳細に書かれているため引用する。

また奈良の薬師寺の三尊について語ったとき、先生はいきなり、「あの像をまだ見ない人があるなら私は心からその人を羨む」というようなことを云い出した。そうして^{あっけ}突然に取られている我々に、あの三尊を初めて見た時の感銘を語って聞かせた。特に先生が力説したのはあの像の肌の滑らかさであったように思う。あの像も亦単に色や形のみ見るのではなくして、まさしく^あ触感を見るというべきものである。それもただ銅のみが与え得るような、従って大理石や木や漆器などには到底見ることの出来ないような、特殊な触覚的の美しさである。しかもそれが黒青く淀んだ、そのくせ恐

ろしく光沢のある、深い色合と、不思議にびったり結びついている（和辻，1936a）。

以上の岡倉による発言は、上記以外の文章²⁰からも岡倉の言葉から受けた影響を知ることができる。ところが、和辻は岡倉の言葉に刺戟され早急に西の京を訪れてはいない（和辻，1959：216）。しかし、ロシアや北欧の近代文芸、フランスの印象派の絵画やロダンの彫刻、音楽では蓄音器のレコードなど興味の対象が次々現れたなかでも、これほどまで和辻の印象に強く残っていること、また岡倉を和辻いわく良い意味を含んだ煽動家²¹であると表すなど和辻にとって岡倉の存在は大きかったといえる。

和辻が西の京へ行き、建築や仏像に興味を持ったのは、岡倉の講義を聞いてから数年が経った大正5、6年の頃である。この頃東京帝国大学の美術史研究室で春休みに行われた見学旅行に加わり、初めて奈良の様々な寺院を訪れている。

瀧によって引率され実際に西の京を訪れたのは見学旅行の2日目である。ところが和辻は、岡倉の講義における言葉によって大きな期待を持っていた薬師寺金堂の薬師三尊には、それほど強い感銘を受けず、むしろ塔、さらには東院堂の聖観音像に強い感銘を受けている。しかし、聖観音像については「この像からは、わたくしは、岡倉先生の言葉をそのまま移して使ってもよいほどの、強い感激を受けたのである」（和辻，1959：218）と述べていることから、岡倉の発言を忘れ去っていたわけではないといえる。また「この聖観音像がわたくしに古代日本への眼を開かせてくれた」（和辻，1959：219）と『古寺巡礼』の執筆につながる発言も見られる。

先ほども述べたように、和辻が学生時代に最も深い感銘を受けたものは、岡倉の「泰東巧芸史」と大塚の「最近文芸史」であったが、和辻によると大塚の講義は「……熱烈な好学心をひしひしと我々の胸に感じさせ、我々の学問への熱情を知らず知らずに煽り立てるようなもの」であり、岡倉の講義は「同じく熱烈ではあるが然し好学心ではなくして芸術への愛を我々に吹き込むようなもの」（和辻，1936a）であった。

然し先生が或作品を叙述しそれへの視点を我々に説いて聞かせる時、我々の胸にはおのずからにして強い芸術への愛が湧きのぼらずにはいなかった。一言に云えば先生は我々の内なる芸術への愛を煽り立てたのである。これはあの講義の事実的内容よりも遙に有意義なことであったと思う（和辻，1936a）。

これまで述べたように、岡倉の講義の特徴は、美術品についての事実的知識を伝えるのみではなく、美術品を見る視点と鑑賞方法を論じたことであった。それは確実に『古寺巡礼』さらには、観光都市奈良の発展文脈にも関わるひとつの要因であった。

5. 「泰東巧芸史」から『古寺巡礼』へ

本章では、実際に岡倉の講義での発言と和辻の回想を比較してみたい。一例として「泰東巧芸史」において、和辻が感銘を受けたという薬師寺の薬師三尊についてどのように記述されているのであろうか。受講生の講義ノートで構成された「泰東巧芸史」では薬師三尊について以下のように記述されている。

……薬師寺金堂の三尊は銅像中の最優等の神技と推すべきもの、独り東洋のみならず西洋にも此の右に出づるもの無し（岡倉、1980a：291）。

以上のように、「泰東巧芸史」の講義録には、薬師三尊の卓越性について簡潔に示されている。しかし、和辻によると、実際の講義で岡倉は薬師三尊について以下のように述べていたという。

その内容は正確には覚えていないが、先生が特に力説したのは、あの像の肌の触覚的な美しさであったように思う。形も好いし、色も実に好いのであるが、そういう好きがすべて触覚的なよさの中に融け込んでいるのである。それは銅という材料のみが与え得る特殊な感じ、従って大理石や木や漆器などからは到底得ることの出来ない、特殊な触覚的な美しさである。しかもそれがわれわれの触覚によって感じられるのではなく、あくまでも眼に見えるのである。黒青く淀んだ、そのくせ恐ろしく光沢のある、深い色合、柔軟であってしかも強靱な、流動するが如き輪郭、そういう色や形として見えるのである（和辻、1950b：53）。

上記の引用から、和辻は、岡倉の講義では薬師三尊の「触覚的な美しさ」が論じられていたと述べている。しかしその触覚は実際に手で触って感じ取るものではなく、色と形という「眼に見える」ものであった。

同じ薬師三尊について、和辻は『古寺巡礼』のなかで以下のように述べている。

あの真黒なみずみずした色沢だけでも人を引きつけて離さないものである。しかもその色沢がそれだけとして働いているのではない。その色沢を持つ面の驚くべく巧みな造り方が、実は色沢を生かしているのである。そうしてその造り方には、銅という金属の性質に対する十二分の理解が織り込まれている。特殊な伸張力を持った銅の、云わば柔い硬さが、芸術家の靈活な駆使に逢って、あの美しい肌や衣の何とも云えず力強いなめらかさに、——実質が張り切っていないがらとろけそうに柔い、永遠に不滅な

ものの、硬さと冷たさを持ちながらしかも触るれば暖かで握りしめば弾力のありそうな、あの奇妙な肌のところもちに、――化し去っているのである（和辻，1919：209-210）。

ここで和辻は、「みずみずしい色沢」、「柔い硬さ」、「とろけそうに柔い」など独特の表現を使用している。しかし、この表現は、先ほど引用した岡倉による講義での発言と類似している。「薬師寺三尊の存在を私の心にはっきりと焼きつけたのは、岡倉覚三先生の言葉である」（和辻，1950b）と述べているように、薬師三尊に関して和辻は岡倉の講義から影響を受けているといえる。

以上、和辻が東京帝国大学在学時に受講した「泰東巧芸史」を検討することによって、『古寺巡礼』には岡倉の影響が及んでいることが確認できた。ここに仏像の見方における岡倉と和辻の連続をみることができる。

6. まとめ

ここまで、奈良が観光地として発展する文脈における仏像の見方について、岡倉の講義と和辻らの回想記との関連から検討を行った。

「泰東巧芸史」は1910年（明治43）の1学期間のみ開講された講義であったにも関わらず、のちに和辻哲郎、児島喜久雄、香川鉄蔵、黒田鵬心、内藤堯宝らはその回想を記している。それら回想記を手掛かりに「泰東巧芸史」を検討することによって、岡倉の講義ノートのみでは理解し難い、仏像を見る視点と鑑賞方法を論じるという特徴を理解することができた。

本稿で取り上げた『古寺巡礼』は、学問的ではない内容が多くの人々に受け入れられ、出版以降多くの人々を奈良へ誘うこととなる。しかし、そこには和辻が『古寺巡礼』を執筆する際に影響を受けたと考えられる岡倉の講義「泰東巧芸史」の存在があった。岡倉の講義を受講した和辻が『古寺巡礼』を執筆することによって、仏像の見方が文化人の語りとして次々と連続し、やがて現在の旅行案内書や博物館での展示例のように一般化することとなる。奈良が観光都市として発展する文脈には、物理的な要因だけではなく、文化人の語りも影響しているといえる。

本稿では岡倉と和辻による語りの連続と現在の間を埋められるような考察までは至っていない。そのため、それらを今後の課題としたい。

注

1. 1897年(明治30)6月10日公布。
2. 1890年(明治23)に奈良～王子間(現JR),1914年(大正3)に奈良～大阪間に鉄道が開通(現近鉄)。
3. 1993年に「法隆寺地域の仏教建造物」,1998年に「古都奈良の文化財」,2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が登録されている。
4. 以降「おいしい郷土料理」が18.2パーセント,「刺激的な観光ルート」が16.3パーセントという結果が続くが,上位3項目はその割合の差からも特に期待されている項目であるといえる。
5. 社団法人中小企業診断協会 奈良支部『『奈良県観光の実態調査』報告書』(2004) <http://www.nara-shindanshi.jp/> 事業内容-1/2-調査研究/h16 調査研究/(最終取得日2014.7.2)
6. 中谷はここで平成9年「奈良県観光実態調査」の「留置調査」で行った質問と結果を引用している。
7. 「お堂でみる阿修羅展」は,展示場所が博物館ではなく,興福寺・仮金堂という仏像本来の姿を尊重した展示方法であると考えられるが,人々が阿修羅像を鑑賞の対象として捉えていることに変わりはないと考える。
8. 『古寺巡礼』は,和辻が奈良を世界的な視野で捉えた点も特徴的であり,そのような議論も多々存在する(鈴木,2004)。本稿ではそれらの議論を踏まえて考察を行いたい。
9. 国立国会図書館の検索サービス「国立国会図書館サーチ」を使用すると,国立国会図書館が所蔵する『古寺巡礼』というタイトルの書籍の中で,和辻の著作が最も古いものだとわかる。<http://iss.ndl.go.jp> (最終取得日2014.7.21)
10. 「この奇妙に美しい仏像を突然見出したフェノロサの驚異は,日本の古美術にとって忘れ難い記念である。……このフェノロサの発見は我々日本人の感謝すべきものである。しかしその見解には必ずしも悉く同意することが出来ない」(和辻,1919:326—329)とフェノロサの見解に意義を述べているが,本稿では,『古寺巡礼』でフェノロサについて言及されているという確認にとどめておきたい。なお,本稿の引用にあたって旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めている。
11. 「泰東巧芸史」という講義の題目は,岡倉が作り出した言葉であり(岡倉,1980a),「巧芸に泰東の二字を冠したのは,泰西に対する泰東の意味で,東洋をあらわす新語」である(岡倉一雄,1971:238)。同じく,香川(1966),黒田(1913)も講義の題目について言及している。
12. 1913年(大正2)9月に死去した岡倉の人生において,講義が行われた1910年(明治43)は晩年であるといえ,東京帝国大学で講義を行うまでの岡倉は,東京美術学校の開校,校長を務めるなどをしており,すでに知名度が高かった。
13. 本稿の「泰東工芸史」は最も多くの文献を参照して編集していると判断できる『岡倉天心全集 第4巻』(平凡社,1980)に拠る。『岡倉天心全集 第4巻』には,筆記ノートによる「泰

- 東巧芸史」だけでなく、「泰東巧芸史講義メモ」が収録されている。この講義メモは『泰東巧芸史』の講義に際して岡倉が執筆したものである（吉田・木下，1980：532）。
14. 記事題目は「岡倉覚三先生を悼む」であり、岡倉は1913年（大正2）9月2日に52歳で死去しているため、この記事は岡倉の訃報を聞いて間もない間に執筆された記事であるといえる。
 15. 講義メモは「……先生の貴重な遺品として今なおここに保存されているであろうが、それを analogy として後代の美術史家が肉づけしてみたところで、少なくともそれは明治四十三年東大での講義とは似而非なるものであると、私は断言して憚らない。事実、岡倉先生の講じられたことは、此のメモをそっちのけにして、ただ先生の脳裡に去来する image を手掛かりとし、ひたすらインスピレーションのままに陳述して居られたのであろうと思われてならない」（香川，1966：2）。
 16. 和辻哲郎（1936a）。初出である『帝国大学新聞』1936年（昭和11）1月27日には「書評 籠る真実の美 天心全集発刊に際し岡倉先生のことども」と題して掲載されている。その後は、「岡倉先生の思い出」と題して坂部恵編（1995）『和辻哲郎随筆集』岩波書店、および橋川文三（1982）『岡倉天心 人と思想』平凡社、和辻哲郎（1963）『和辻哲郎全集 第17巻』岩波書店に収録されている。
 17. 「泰東巧芸史」を指す。この書評内で和辻は岡倉の講義を「東洋巧芸史」と表記しているが、「泰東巧芸史」を示していると考えられ、本稿では統一させるため「泰東巧芸史」と表記する。
 18. しかし、「西の京の思い出」を参照すると、友人である魚住影雄から講義ノートを借りて興味を持った関野貞による日本建築史の講義からも強い影響を受けていることがわかる（和辻，1959）。
 19. 岡倉の「まだ行ったことのない人は手をあげてごらん下さい」という言葉に和辻は、昨年奈良を訪れたが西の京までは足を延ばさなかったことを恥ずかしいと感じたというが、辺りの受講生を見渡すと、挙手した学生の方が多かったため、安心したという（和辻哲郎，1959：215）。
 20. 「『あの驚嘆を再びすることが出来るなら、私はどんなことでも犠牲にする。』この言葉は今でも自分の耳に烙きついている。先生は別にそれを強めて云ったわけでもなければまた特に注意をひくような身振りを以て云ったわけでもない。がその言葉には真実が籠っていた。そうして我々はまざまざとその味わいを会得することが出来たのである」（和辻，1936a）。
 21. 「先生が明治初年の廃仏毀釈の時代に如何に多くの傑作が焼かれ或は二束三文に外国に売り払われたかを述べ立てた時などには、実際我々の若い血は湧き立ち、名伏し難い公憤を感じたものである。があの煽動は決して策略的な煽動ではなかった。我々のうちの眠れるものを醒まし我々のうちの好きものを引き出すのが、煽動の本質であった」（和辻，1936a：30）しかし、香川（1966）は、和辻が岡倉を煽動家であると言ったことに関しては同意し難いと述べている。

参考文献

- ・井上哲次郎 (1925) 「濱尾子爵を追懐す」 学士会『学士会月報』(451), pp41-59
- ・魚住洋一 (2013) 「偶像再興の旅——和辻哲郎の〈日本回帰〉」『美術フォーラム 21』(28): pp64-68
- ・遠藤英樹 (2005) 「観光という『イメージ』の織物——奈良を事例とした考察」 須藤廣・遠藤英樹 (2005) 『観光社会学——ツーリズム研究の冒険的試み』 明石書店, pp93-116
- ・旺文社 (2010) 『マップルマガジン 歩く奈良大和路』 旺文社
- ・岡倉一雄 (1971) 『父岡倉天心』 中央公論社
- ・岡倉天心 (1980a) 「泰東巧芸史」 『岡倉天心全集 第4巻』 平凡社, pp257-316
- ・——— (1980b) 「泰東巧芸史メモ」 『岡倉天心全集 第4巻』 平凡社, pp317-371
- ・小川伸彦 (2007) 「表象される奈良——B面の『なら学』のために」 『奈良女子大学文学部研究教育年報』 3: pp27-32
- ・香川鉄蔵 「聴講の思い出」 岡倉天心 (1966) 『岡倉天心全集 第4巻』 「月報5」 平凡社, pp1-4
- ・清見陸朗 (1980) 『天心岡倉覚三』 中央公論美術出版
- ・黒田鵬心 (鵬心生) (1913) 「オノト雑記 岡倉覚三先生を悼む」 1913年(大正2)9月7日付『読売新聞』
- ・JTB パブリッシング (2010) 『奈良 大和路 '10 ~ '11』 JTB パブリッシング
- ・杉山二郎 (1980) 「泰東巧芸史と天心と」 『岡倉天心全集 第4巻』 「月報5」 平凡社, pp5-7
- ・鈴木廣之 (2004) 「和辻哲郎『古寺巡礼』——偏在する美——」 『美術研究』 384: pp131-149
- ・内藤亮宝 (1922) 「院展所感」 『美術画報』 第45編巻12, 画報社, pp8-10
- ・中谷哲弥 (2001) 「奈良県における『文化観光』の再考」 『奈良県立大学研究季報』 12(1): pp87-97
- ・永島福太郎 (1971) 『奈良県の歴史』 山川出版社
- ・宮川寅雄 (1968) 「解題」 岡倉天心『明治文学全集 38 岡倉天心集』 筑摩書房, pp417-426
- ・矢代幸雄 (1960) 「仏像と人体美」 近畿日本鉄道創立五十周年記念出版編集所編『大和の古文化』 近畿日本鉄道株式会社, pp176-198
- ・吉田千鶴子・木下長宏 (1980) 「解題」 岡倉天心『岡倉天心全集 第4巻』 平凡社, pp524-536
- ・和田萃・安田次郎・幡鎌一弘・谷山正道・山上豊 (2003) 『奈良県の歴史』 山川出版社
- ・和辻哲郎 (1919) 『古寺巡礼』 岩波書店
- ・——— (1936a) 「書評 籠る真実の美 天心全集発刊に際し岡倉先生のことども」 『帝国大学新聞』 1936年(昭和11)1月27日付, (1984) 『復刻版 帝国大学新聞』 不二出版
- ・——— (1936b) 「岡倉先生の思い出」 橋川文三編 (1982) 『岡倉天心 人と思想』 平凡社, pp28-30

- ――― (1947) 『古寺巡礼』(改訂版) 岩波書店
- ――― (1950a) 「いくつかの思い出」 鈴木三男吉編 『心』 9月号, 日本評論社, pp55-58
- ――― (1950b) 「薬師寺三尊」 『芸術新潮』 1 (9) 新潮社, pp53
- ――― (1959) 「西の京の思い出」 近畿日本鉄道創立五十周年記念出版編集所編 (1960) 『大和の古文化』 近畿日本鉄道株式会社, pp211-225
- ――― (2012) 『初版 古寺巡礼』 筑摩書房

野性への旅の記憶

高田公理*

Memory of a Trip to the Wild

TAKADA Masatoshi Yasutaka

1997年9月だから17年も昔の話である。野生動物をテレビ映像に撮り続けている友人とアフリカに行く機会があった。

ケニアのナイロビから自動車以南へ5時間、途中で国境を超え、タンザニア第2の都市アリューシャに着く。そこから再び3時間、土煙の舞い上がる未舗装の道路を走ったところに、めざす自然保護地区（Conservation Area）ンゴロンゴロ・クレーター（Ngorongoro Crater）はあった。

ンゴロンゴロは標高2,000メートル前後、阿蘇と同じ程度の規模のカルデラである。およそ260平方キロの平坦な火口原を、600メートルばかりの外輪山が囲んでいる。その頂上から眺めると、火口原の中央に干あがったソーダ湖が白く輝き、あちこちに緑の森を残しながら、それを取り囲むように草原が広がっていた。ここは類人猿やキリンなど、ごくわずかの種を除いて、アフリカの野生動物のほとんどが棲息する、多様な生態系をワンセットそろえた、自然のマイクロコスモスなのだ。

そこで出会った動物は、肉食獣のライオン、ハイエナ、ジャッカル、草食獣のゾウ、サイ、バッファロ、カバ、シマウマ、ヌウ、ガゼルなど、およそ20種類に及んだ。当然すべてが野生動物である。その表情には、飼育動物とは異なる主体的な意志のようなものが感じられる。ふるまいには、人工の世界を超越するかのような優美さが見てとれる。同行のテレビ関係者も、そう感じているようであった。

「ふたりでやって来るのはゾウさんかな、それともバッファロかな。やっぱりゾウさんだ」「あのヒト（メスライオン）、さっきからずっとゼーさん（ゼブラ＝シマウマ）のほうを見ているよ。どうするのかな？」

彼らは野生動物のことを、まるで人格を持った人間であるかのように話す。理由を聞く

* 佛教大学社会学部教授



写真 ンゴロンゴロ・クレーター（撮影：筆者）

と、最初は「何頭」と数えていたのだそうだ。それが、いつのまにか「何人」という数え方に変ったという。野生動物を眺めているうちに、威厳に満ちた優美さが、彼らを人間扱いさせるようになったらしい。

そういえば、ときに餌食にされるバッファロの、ライオンに対する視線には、怨嗟の色が感じられる。深夜、彼らの集団同士が偶然に出会った際には、小さな子供のライオンを狙って急襲するバッファロを見たことがある。そこには確かに、暴力に託して、普段の怨念をぶちまける野性の生命力の自在な闊達さが炸裂していた。

そのライオンの群れが翌日は、ときにオスがメスに乗かったり、ひたすらのんびり昼寝していたりする。と思っていると、腹が減ったのか、一頭のメスを先頭に、やや弱ったかに見えるバッファロを狙って襲いかかる。そこには性と食の欲望を満たす行為を、その心身が命じるままにやっけてのける自在の野性がほとぼしる。

つまり野生動物たちは、いつも体内の情報、言い換えると心身が語りかける声に注意を払いながら、それに素直に従って行動するように見える。それに比べると私たち現代人は、文明化された社会に流布する体外の情報に拝跪して、しばしば生命それ自体の命じる声を圧殺する。野生動物を眺めていると、あらためてそう思われる。そして私たちの心身に巣くう息苦しさが緩んでいくような気がしてくる。

文明が撓める好奇心と暴力性

いったい野性とは何なのか。通常は「自然または本能のままの性質。粗野な性質」だとされる。腹が減ったら食べ、発情したらセックスをする。子供が生まれたら可愛がり、疲れたら休む。珍しい物事に出会えば探索し、敵に襲われたら攻撃するか逃げる。自然の山野に育った野生動物は、すべてを本能が命じるままにやっけてのける。それでも環境への影

響や仲間同士の争いが破局に至ることはない。本能の命じる欲望は一定の枠を逸脱しないからだ。その点で野性は粗野より、むしろ優美を感じさせる。

しかし人間は、そうはいかない。著しく未成熟な状態で生まれてくる人間の本能は、岸田秀『ものぐさ精神分析』(1977, 青土社)が指摘したように、どこかが壊れている。それが証拠に人間の赤ん坊は、他の動物と違って、ときに食べられないものでも口に入れてしまう。発育した人間は、子どもを生むことに結びつかない快樂のためだけでもセックスをする。だからこそ、食欲や性欲が過剰に迷走しないように、本能を適切に水路づける「文化」という名の人工の約束事としつけが不可欠となるのだ。

ここに人間の社会生活をめぐる重大な3つの困難が生じる。

その第1は「適切であること」をめざしつつも「人間の思いのまま」にデザインされた文化は、つい自然の許す範囲を超えて過剰な欲望に翻弄されるという問題である。環境容量を超えた資源消費がもたらす地球環境問題はその結果にほかならない。

第2は、野生動物なら生まれつき具わっている同種個体間の争いを終らせるメカニズムが、人間の場合は有効に機能しないという問題である。生活様式や価値観の異なる異民族や利害の異なる国家間の争いが、際限なく拡大していくのはその一例である。

これらの困難は、21世紀の人類社会が直面する2つの大きな問題となりつつある。

そこで人間は、これらの問題に対処するために、みずから創りだした科学や技術、芸術や思想などの文化を総動員して、壮大な装置や制度からなる文明のシステムを工夫する。しかしそれは、場合によると困難を一層拡大する。

このことを高谷好一は、つぎのような言葉で捉える。

槍で人間をブスッと突き刺す時には、気持が悪くなり、ナムアマダブツ許してくれよ、という気になるのだろうが、ボタンを押して原爆でボーンと殺してしまったら、たとえ何百万人殺しても、そんなことは全然思わない。今ではこのように、中間に入るものがたくさん存在しすぎており、人間が直接的、本能的反応をしようる機会をなくしてしまっている(高谷好一、1996「いま求められる今西錦司の自然観」『アウローラ』6号)。

とは言いながら他方、かりに文化の外皮を剥ぎ取ってしまうと、その同じ人間が今度は、生のままの食欲や性欲、好奇心や攻撃性など、野性の本能を露わに示し始めもする。その結果、それを適切に撓めるために構築された文明の装置や制度が、翻って人間の心身に不快な不適応感をもたらす。ここに3番目の困難が生じる。

なかでも、探索行動を呼び起こす好奇心と自己保全のための攻撃性——文明の装置と制度が重装備化され、人間の生活を強く制御するのに伴って、これら2種類の野性の本能は確実に力を失っていく。

実際たとえば、現代人が現代社会に適応しようとするれば、文字情報をはじめとする膨大な知識と技術の修得を求められる。それらは本来、子供から大人に育っていく過程で、日常生活、とりわけ遊びの過程で学べるよう工夫されていれば、むしろ楽しい体験として受け入れられるはずのことなのだ。しかし、現代日本の学校教育にあっては、ひたすら既知の情報を注入しようとする試みが、しばしば苦行にも似て、若者たちが本来なら秘めているはずの生の好奇心を萎えさせる役割を果たしがちとなる。

いまひとつ重要なのは、徹底的に撓められる攻撃性である。いくら腹が立っても暴力はいけない。実際、現代社会は暴力的なものに対して徹底した圧力を加え続けようとする。にもかかわらず、というより、だからこそ、限度をこえて抑圧され、かえって抑制を失った攻撃性が、あらゆる場所でいじめや暴力をたれながす。

もとより攻撃性や暴力を賞揚しようというのではない。ただ人間が動物である以上、破局に至ることのない方法で、それを解発 (release) する回路もまた欠かすことができないのではないかと思われる。

「心身の内なる声」に耳を傾ける

これとよく似たことは、個人の生活にもあてはまる。たとえば飽食の時代の食生活は、多様なメディアが伝える情報に左右されがちである。

「どこそこのレストランがうまい」「活性酸素をへらして若さを保つ食品」「ダイエットに成功する方法」

しかし、根拠のはっきりしない情報のどれを、どんな基準で選ぶのか。明快な答は存在しない。いずれもが、だれかの勝手な妄想か、メディアの力で客観的な知識であるかのように扱われて流布する。しかし、それらはすべて、受け手にとっては体外からもたらされる情報にすぎず、体の求めるものと一致するという保障はないのだ。

そこで思い出すのは、むかし北海道の根釧原野に住む開拓農民から聞いた話である。入植まもない1960年近くになってなお、楽しみは毎週一回の、たっぷり砂糖の入った汁粉だったというのだ。その翌日はテキメンに体が軽くなる。しかし、やがて何日かが経つと、またまた甘いものがほしくなる。体が必要とする食べ物は体内の情報、つまり「心身の内なる声」に耳を傾ければ、正確かつ容易に判明するはずなのだ。

このことは、証（漢方薬に対応する患者の心身の総合的状态）を捉えるのがむづかしい患者に処方する薬の選定にも応用されてきた。漢方医は、微妙に異なる複数の処方を用意して患者に服用させ、いちばん美味を感じる処方を最適とする。俗に「良薬は口に苦し」というが、少数の例外を除いて、本当は「良薬は口にあまりく」なければならないのである。

ところが、現代日本人のなかには、それを特定できない人が少なくない。無理もない。

たいていの判断を心身の声とは無関係に、科学的知識や社会の約束事に照していただく訓練ばかりを受けているからだ。

胃が弱っているのに、X線写真の結果からしか気づけない。「少しばかり暴力的でも、きつく叱ってほしい」と息子や娘が考えているのに、暴力を絶対悪とみなす世相に引きずられる父親は、引きつった笑顔しか返せない。そこには心身の声に耳を傾ける機会の少ない現代人の哀しさが彷彿する。

これらのことは「野性の喪失」と呼ばれるのがふさわしいのではないか。というのも、たとえば熱帯のジャングルに放りだされて極限の孤独を強いられ、戦後30年ちかく経った1970年代に「発見」された元日本兵の横井庄一さんや小野田寛郎さん——彼らは心身の内なる声に耳を傾けることで苛酷な生活をまっとうすることができた。なかでも横井さんは、医者が驚くほど早期に感じた微細な自覚症状から自分自身の胃ガンを発見し、その克服に成功したとされる。

河合隼雄（臨床心理学）が「私の養生術」に記す、ロシアの宇宙飛行士レベデフをめぐるエピソードにも、これとよく似たところがある（1995、『is（特集：養生術）』ポララ文化研究所）。その概略を紹介すれば、

かれは200日以上も宇宙飛行を続けた。これは大変なことで、たとえば無重力状態では相当な身体の運動をしないと、地上に帰って立つこともできない体になってしまう。だから宇宙飛行のあいだ、食事、睡眠、身体の運動など、鉄の意志で生活を律してきたのだと思っていた。

しかし案に相違してレベデフさんは「体の声にしたがって生きていた」という。体が「運動したいな」というと運動する。睡眠時間なども、まったく体まかせ。すると苦痛は少ない。……だが、それは日常生活では不可能であろう。せいぜい「なるべくなら体の声にしたがおう」と思えるぐらいである。むしろ極限状態のほうが、それが聞こえる可能性は高い。本当に危険なときは体から信号があるはずだ。

なるほど、そういえばスキューバでしか息のできない海に潜ると、体の声に気づかされる。呼吸のたびに動くレギュレータ（調節装置）の弁と息の音のほかは完全な静寂に包まれ、あたりの風景は、まるで非日常の別世界なのだ。しかも、気分が軽いトランス状態にたゆたうからか、普通は写真のほうが美しく見える地上の風景と違って、海中では写真より現実の風景のほうがずっと美しく見える。

海水の澄んだ青と陽光の金色、極彩色のサンゴやサカナ……。やがて視覚以外の感覚がすべて内側に向かうのであろう。心臓の鼓動が直接に聴覚神経に届き、水圧を受けて運動する手足の筋肉、冷たい水中でせつせとエネルギーを発散する内臓の営みが、そのまま体の声として伝わってくる。

ケハレの時代の「ハレ」体験

と述べたところで、唐突ながら、まだ小学生だった私が近所のガキ大将の横暴に腹を立て、やおら野球のバットで、しかし最も安全な彼の尻を叩いたことを思いだす。そのとき彼は大声でわめき、大粒の涙を溢れさせながら家へすっつんで帰った。

ひどい話である。ただ当時の、私たち少年たちの間には、けて致命的な暴力はふるわないという暗黙の了解知があった。喧嘩は、動物である人間が隠し持っている暴力的な攻撃性を昇華する一種の儀礼のようなものだったのだ。そこには、過剰に相手を傷つけることのない無意識の配慮があり、心身から、すーっと邪気が抜けていくような快さがあった。その記憶は今なお心身のどこかに残っている。

だからといって、暴力との付き合い方を学ぶことのない現代社会に、これをそのまま当てはめることはできない。ただ、現代の人類が直面する3つの困難を超克するには、何か途轍もない暴力性の爆発が必要なのかもしれないという気がする。それというのも、環境容量を超えて巨大化する現代文明、とめどなく拡大する民族紛争、それらを克服するための文明システムに抑圧される人間の心身が感じる不適応感といった困難を乗り越えることは、なまなかなことでは出来そうにないからである。

それは宇宙飛行士のレベデフが、宇宙空間の極限状況と現代の先端技術の粋を集めた宇宙船による拘禁状態のもとで、それを突きぬけるために、すべてを心身の野性にあずけるという、その限りでは「暴力にも似た無茶」を試みたのと同じことのように思われる。

そこで冒頭の野生動物を眺める旅に戻る。すると彼らの心身には、途方もない暴力性と体内の情報、つまりは心身が語りかける声のままに行動することで発せられる野性が溢れているのだという思いが蘇ってくる。それは、ンゴロンゴロのサバンナ(乾燥疎開林)に限った話ではない。熱帯のジャングルや澄みきった海中世界、きびしい極地や砂漠など、多様な相貌の大自然には、それぞれ特有の動植物が棲息しており、彼らは私たちに、多様な野性の暴力性と自在な優美さを感じさせてくれるのだ。

それだけではない。これらの場所で出会う風景や音、空気の質や匂いは、私たち現代人が忘れしがちな生の好奇心を呼び起こし、私たちが本来的には持って生まれているはずの探索行動を触発する。

たとえば熱帯のジャングルで、往年の昆虫少年に戻った大人が極彩色のチョウや虫に瞳を輝かす。おびただしい種類の鳥や虫の声に満ちた、しかし不思議な静けさを感じさせる音環境に、多忙と喧騒の都市生活に疲れた現代人が心身を癒す。この文章の冒頭で触れたサバンナにおける野生動物との出会いもまた、私たち現代人の心身のどこかに潜んでいる、みずからの野性を思い出させてくれる。

こうしてみると「野性への旅」は、現代における新しい型の「ハレ体験」であるのかも

しれない。かつて日本人は、元気や病気の「気」に通じる日常の「ケ（藪）＝生命力」が枯渇してくると、非日常的な「ハレの行事」を催して、それを回復しようとした。つまり、日時を定めて多数の人が集まり、神を祀って普段とは異なる晴着に身を飾り、ともに神々にお供えした御馳走や酒のお下がりを楽しみ、歌や踊りを遊び、大騒ぎすることで心身を癒し、生命力の蘇りを期待したのだ。

ところが今日、昔はハレの時空間でのみ提供されたこれら人工の文化が、日本の場合にはどこでも日常的に享受できる。そのための装置と制度を具えた現代の都市を、神崎宣武は「ケとハレが渾然と一体化した『ケハレの都市空間』」の名で呼んだ（1993『盛り場の民俗史』岩波新書）。そんな状況下では「人工の文明」がもたらす刺激と喧騒から逃れて大自然に抱かれ、対極にある「本能と野性」を体験することこそが、衰えた生命力を回復する「ハレ体験」としての意味を持つのではなかろうか。「野性への旅」は、そんな試みの機会にほかならないのだと思う。

そう述べたところで、今ひとつ思い出されることがある。それはかつて経済の高度成長が時代の流れを先導し始めた時代の記憶に結びついている。そのころ「清浄野菜」といえば、肥料に人糞など使わず、化学肥料と農薬で「清浄に育てた野菜」のことであった。それから半世紀が経過した今日、現代日本人が「清浄野菜」といえば、まるで正反対に、堆肥や家畜の糞を肥料として、農薬などは使わずに「清浄に育てた野菜」を意味するようになった。

こういう観念の逆転現象が、さまざまところに観察できる。「文明と野蛮」という概念対立の形式にも、それはあてはまる。つまり、かつて「野性」からの連想は「野蛮」につながった。そこでは「文明」こそが「優美」であった。それに対して今日では「文明が野蛮」を、「野性が優美」を、それぞれ連想させるという気がする。「野性への旅」は、そんな「気づきの旅」でもあるように思われる。

宿泊施設のコモディティー化と ものがたり観光の夢

李 有師

1. ペンション経営の昔ばなし

時はバブル前夜。昭和57年(1982)夏、27歳のボクは琵琶湖西岸、JR湖西線・近江舞子駅から山間に入った比良山麓で、長年の夢であったペンション経営を試みた。旧・志賀町(現・大津市)域は、当時、大小織り交ぜると約120ヵ所ほどの企業保養所(健保組合等が所有する“企業所有含む”)が林立、バブル前夜でもあったので、個人経営者も「保養所です」と“税務表現”できる別荘の所有に走った。その数は膨大であった。

レジャーシーズンや週末ともなると、それら企業系宿泊施設を利用する観光客は列をなした。JR湖西線は満員。国道161号は夏はウインドサーフィン、冬はスキーをカートップした観光客が数珠つなぎ。一般的な宿はシーズン営業の「民宿」だけ。そのよう

な時代であったから、まだ競合するペンションもなくおかげで、国民金融公庫(環境衛生金融公庫)に返済する月額42万円、借入総額2,700万円は予定を早め完済できた。

いま、その旧・志賀町域の保養所は激減。その後にできた多くのペンションも消えた。中小零細企業は言うに及ばず、大企業においても経営・統治システムの変遷や福利厚生システムの変化が、たった30年ほどの間に、これほどの違いをもたらした。何より、休日に余暇時間を楽しむ「観光スタイル」そのものが、“昔”とはぜんぜん違う。変な話……いまこの時代に、あの頃のボクを想像するのは本人でさえ難しい。

2. 都市型観光の昔ばなし

時は移り阪神淡路大震災の前年(平成6年/1994)。これからは「都市型観光の時



2013年の年次大会開催地、大分県豊後大野市「原尻の滝」。
いまこの地で、ものがたり観光行動への実証が進みつつある。

代や！」と、はばかり、40歳になったボクは、大阪駅・梅田にも近い大阪天満宮の裏門で、勝手に命名した「街角のペンションという業態」を試みた。今回の借入額は1億円を優に超え、毎月の返済金額もため息が出るほどの金額であった。20代とは違い、夢というより、少々自分を試してみたかった……「時代はこっちに行くはずや」と。

「動き出した」そう、確実に感じはじめたのは予約サイトが登場し、海外からの旅人が当たり前のようにやってくるようになった開業10年目あたりから。

予約サイトが広く普及し、パソコンが小型化（スマホを含む）、LCC（格安航空会社）の就航がアジア各地に届きはじめてこの年で、遂に国内外の利用者は逆転。一昨年からは、あろうことか街角のペンションでも、海外利用者の数が圧倒的過半を占めるまでになってしまった。そして今日、その海外旅客を巡って、大阪ではとんでもないことが起こりはじめている。規制緩和をして、足りなくなってしまった「外国人向けの宿」を「膨大に増やそう」という試みだ。古い事務所ビルも、ラブホテルも、「明日からはゲストハウスに」という企てだ。

あの「バブル前夜」に、そっくり！……

そう考えはじめたボクは、足掛け20年間の街角のペンションを今年2月に売却した。減価償却をとくに終えている古いビルやラブホが、堰を切ったようにゲストハウス組に「参入」するとなると、需給バランスが崩れ価格破壊も早い。そう確信したからだ。

3. 目を転じれば未来

レジャー型観光が都市型観光か、琵琶湖か大阪都心か、国内か海外か……という違いを超え、ペンションという小さな宿の経営から見続けてきた観光シーンの変遷は、「好き者の実験的試み」の後には、必ず商売上手な「普及」があり、その後、一定の陳腐化を見たところで汎用化に至るというものだが、今回の規制緩和はそのような生易しいものではなく、例えるならば「ゲストハ

ウスのコモディティ化”と表現されるような激しい社会現象をもたらすに違いないということだ。

都市ストックの質を如何するまでもなく、これは少々ヤバイ。しかしこのヤバイには、未来がある。IT 端末の日常的革新とLCCなど、移動手段の格安提供が今後さらに重なり合うと、「旅人を確実に辺境（日本的には田舎）へと導う」という未来だ。田舎での観光ビジネスは新時代を迎える……はずだ。

4. 田舎のビジネスチャンス

いま、900にも及ぶ自治体が消滅可能性のある地域として、具体的に名を挙げられている。平成の大合併を経たこれら多くの自治体では、地方交付税の著しい減額を前に、これまでどおり行政自ら（もしくは天下り団体等）が管理を継続するわけにもいかず、運営に窮し、様々な施設が閉鎖、そうでなくても指定管理という名のもとに「経営者」を募っていることがある。

地域の宝でもある「観光的な資質を持った施設」、その運営は、まずはじめ「地元民による指定管理」が望まれる。だが、人口減が著しい地域では、地元民による指定管理がおぼつかず、かといって観光ビジネスに長じ、「地域の公益」に理解を示す施設管理者が、やたらと天孫降臨するわけでもない。結果として「やむなく閉鎖」、もしくは断腸の思いでちょっと方向性の違う事業者に「いってしまう」ケースも数多いと聞く……ああ、もったいない。が、もったいないで済ますのは惜しい……世界遺産や温泉ブーム、また巨大施設に寄り掛かるだけといった、観光行為をただただ肥大化させるぶっ飛んだ観光とは別途の小さな観光に未来を感じる。

営々とした地域の物語に寄り添い、農業などのモノづくりや気候風土と一対になった小さな観光——「ものがたり観光行動」への夢。少々齢を重ねたが、そんな夢を遠望する毎日が続いている。

編集規程および執筆要領について 概要

原稿受付は毎年 7/1 ～ 7/31，データ入稿に限る

ものがたり観光行動学会誌は、毎年 7 月末に原稿を締め切り、10 月に 1 巻 1 号を発行する。本誌に論文等を掲載できる者は、編集委員会が特に依頼する場合を除き、共同執筆の場合を含め個人会員名で発表する者に限る。その主な内容を以下に示す。

掲載する内容

1. 大会関係論文（依頼）
2. 研究論文（投稿）
3. 研究ノート（投稿）
4. エッセー（投稿）
5. 文献・図書（投稿）

査読の有無等

本学会編集委員会が別途定めた査読要領に基づき、掲載の可否を審査する。これらの詳細は、本学会ホームページ <http://narrative-tourism.org/> で公開する。

なお、規程・要領は学会誌の改善目的のために軽微な修正が加えられる場合がある。この場合、毎年 11 月末迄に上記のホームページ上に修正箇所を明記して公開する。



旅の 原稿を求めています

旅か観光か?……旅行を楽しんだあとは、旅先で得た出会いや発見、異文化体験・歴史体験、ほのかな恋心、ハプニングなど「ものがたり」を文章に起こし、その行動を一冊の中、記憶に留め置きたい……ものがたり観光行動学会誌は、研究論文・研究ノート
の他、「旅の記憶」をエッセーにしたため、社会に向けメッセージしたい。そう考え、旅の原稿を求めています。

ものがたり観光行動学会誌・年一回発刊

- 投稿は「学会員であること」のみが条件
- 毎年7月末締め切り／投稿への詳細は本学会ホームページ参照
- ただし!! 編集委員会によって「掲載可否」を決定!! ……すなわち少なからずハードルが存在する
- このハードルを越えるのも旅の楽しみ



ものがたり観光行動学会誌

ものがたり観光 Narrative Tourism 第4号

印刷 2014年10月11日

発行日 2014年10月12日

発行／ものがたり観光行動学会

会長／白幡洋三郎（中部大学）

編集代表／ものがたり観光行動学会誌編集委員長 加藤晃規（関西学院大学）

ものがたり観光行動学会

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

佛教大学 社会学部 高田公理研究室 気付

ものがたり観光行動学会 事務局

✉ work@anata.org

●学会誌のご注文、問い合わせは下記まで。

デザイン・印刷／株式会社シンカ・コミュニケーションズ

〒586-0009 大阪府河内長野市木戸西町1-5-7

TEL 0721-52-5934 FAX 0721-53-3859

URL <http://www.cinca.jp> ✉ anata@cinca.jp



表紙について

鳥瞰絵師、吉田初三郎の描いた今回の年次大会開催地、その付近が遠近感のバランスたのしく描かれている。舌を巻くばかりだ。東映京都撮影所はどこか？ 探してみるのも一興である。

2014年10月12日発行

